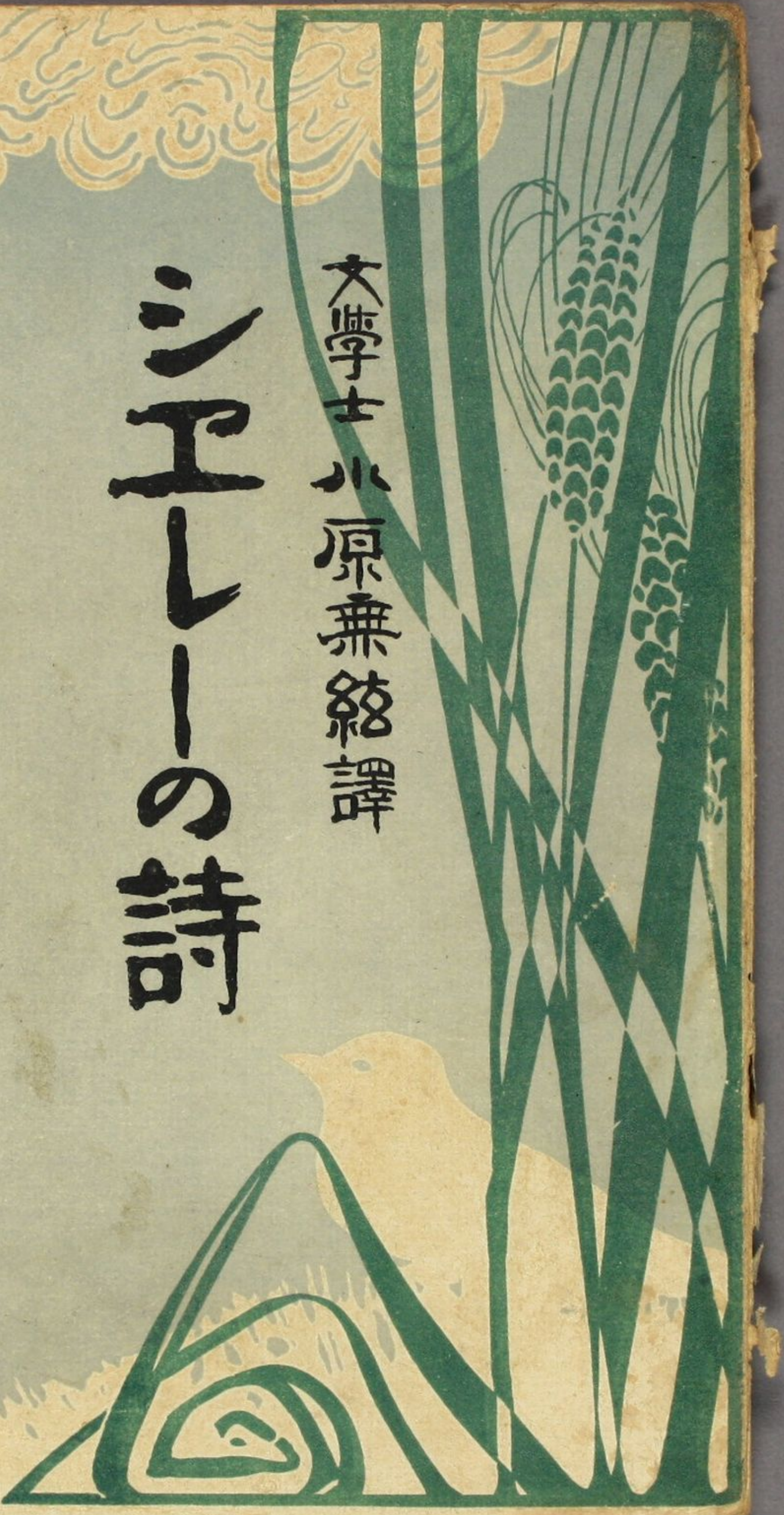


シヤクエーの詩

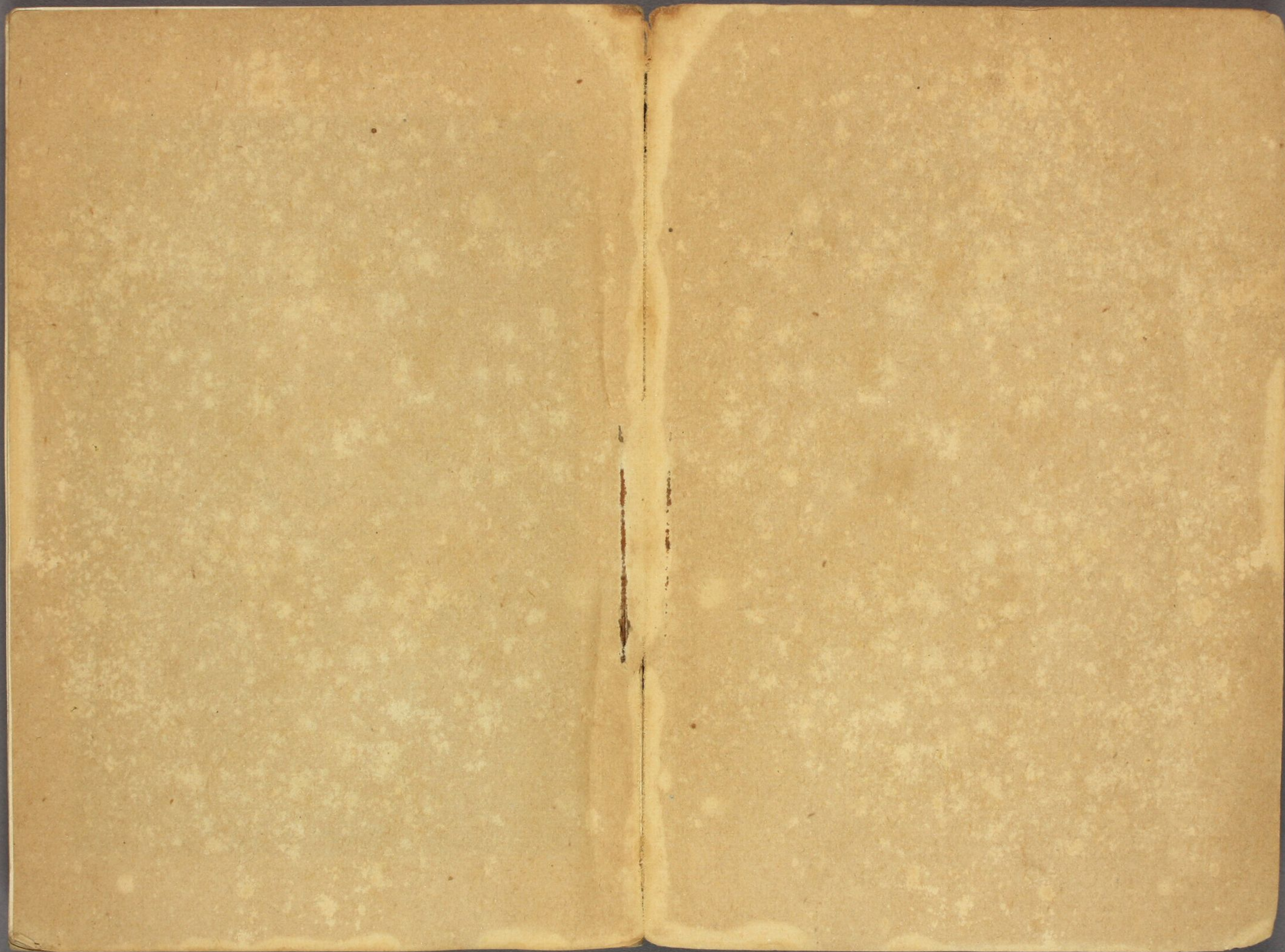
文學士 小原無結 譯

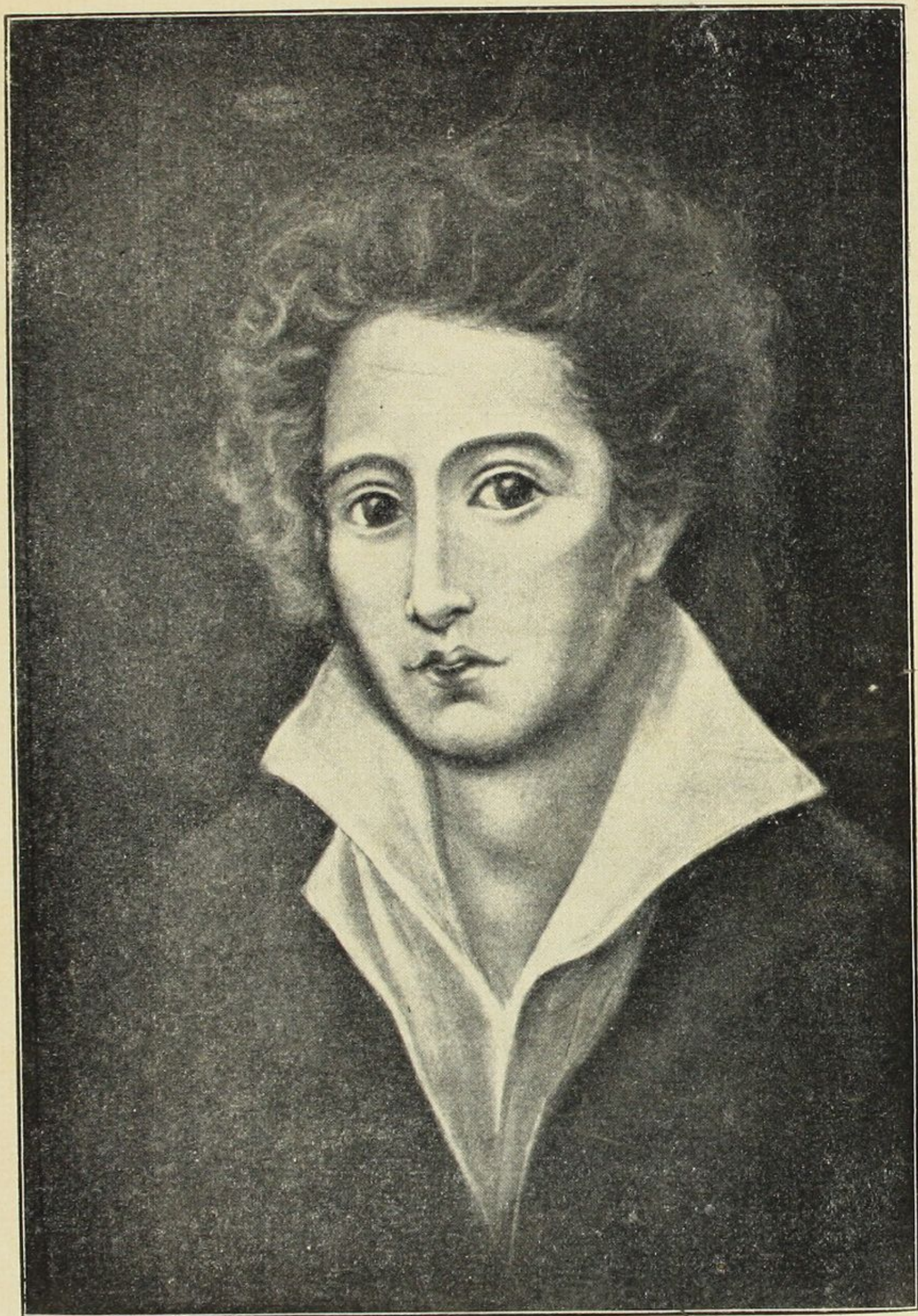
東京 日高有倫堂 藏版



文學部 小原 共 五







*PERCY BYSSHE SHELLEY.*

文學士 成田瀧川君に呈す

哲學的理想派第一流の詩人パーシー、ビッシ、シェリーの詩、長短二十九篇、斷篇四章を摘譯してシェリーの詩といふ。譯者淺學、非才、加ふるに未だ譯詩の事に馴れず、豈よく原詩の金玉を傷づくることなしと言はんや。若しそれ、詩人の幽思、玄想を窺はんとならば、讀て原詩を誦せんには如かじ、この小冊子の一半を割いて原詩を添載したるは偏にこれが爲めなり。この書の爲め特に譯者の親友下中芳岳君は詩人の小傳を草せられたり。錄して謝辭に代ふ。

### シェリー小傳

まこと、カーライルの言ひけん如く、十八世紀は散文・食言・假面の時代なりき。虚偽破産の世紀なりき。魔王の治世なりき。世を擧げて醜濁、作詩家はあれど眞詩人なく、詩の形骸はあれど生命なく、熱誠なる胸奥の琴線は響かざりき。さはれ眠れるもの何時まで醒めずてあるべき、革命の噴火と熱湯、まづ佛蘭西に爆發して自由主義となり、獨逸に濫觴して哲學的思索となりぬ。此の煽蕩の火焔、この汎濫の熱潮は、炎々、滔々、ドブア海峡を越えて、流石に保守現實を重する英國の思想界をも渦巻きぬ。而して此の渦紋の中心たりし多情多恨の詩人、之をパーシー、ビッシ、シェリーとなす。

シェリー彼は、英國詩壇の哲學的理想派を代表せる第一流の詩人なりき、電の如く、露の如き彼が短生涯は、眞に是れ一大悲劇詩、奇絶怪絶、波瀾萬丈、

三十年間の奇蹟的生涯、これ眞詩人たる彼シェレーを最もよく説明するものに  
あらずや。

二

英國サッセックス州ホーシヤム在フイルドブレスの富豪士爵シモシイ、シェレー  
と、その妻エリザベスとの間に、呱呱の聲を上げたる一男兒、これ即ちパー  
シー、ピッツィ、シエレーなり。時は一千七百九十二年八月四日、パイロンに後る  
四年、キーツに先つ亦四年なりき。

パーシー彼は、幼にして聰明、感じ易く、泣き易く、激し易く、而して其の  
少女を愛する情に厚く、妖魔に扮して彼等と嬉戯するを最も好めり、春日、  
天麗かに、小禽梢に唄ひ、紅紫野に笑める時、玉の小童、花の少女、互に手  
をとつて無我無神、歌ひ、踊り、舞ひ、笑ひ、語る所、微風來つて金髪に戯  
る、あゝ何等美しの光景ぞや。

パーシー彼は、十歳にしてシオンハウスの中學に入りぬ、當時、英國各學校

の弊風として、年長學童の年少者を虐使酷待するの甚しき、我慢剛情にして  
熱誠ある彼れパーシーの堪ふる所にあらず、憤怒の念胸中に燃え、熱淚頰を  
傳うて切齒扼腕せしこと幾度、夙く既に此時より彼は神を疑ひてありしなり。

千八百五年の春、雪白櫻紅の顔色、鶯色の頭髮捲々、風采自ら優美と無邪  
氣とを語れども、不正に憤れる眼鏡き一少年、シオンハウスの中學を去つて  
イートンの學校に來れり、之れ即ちパーシーなり。當時彼は、化學電氣の如  
き實驗的科學に興味を有せりき、而も好んで希臘、拉典の語を學び、特に拉  
典の原語を以て詩歌をもよし、人をして其の堪能なるに舌を捲かしめしとい  
ふ、彼は記憶力に富み、且つ一書を繙いて速に其の大綱に通するに巧なりき。

涙は以て彼を制するを得べきも、鞭は以て彼を制すべからず、事を成すや  
銳意熱心、時に放縱無規律なる少年彼は、涙なき公立校にあるに耐へず、此  
處イートンの學校に來つて不平の念愈高じ、一切の壓制と束縛とに抗せんとす

三



するに至れり。一千八百十一年三月廿五日、彼年若きパーシーは、無神論者の名の下に遂に放校の嚴命にあひ、こゝに「オックスフォード」大學を逐はれき。

放校の難に遭ひし彼パーシーは、父の激怒に觸れて歸邸を拒まれ、學資の道をも絶たれぬ。嘲る教師、罵る友、囊中空しく前程遠し、而も彼は斷乎として所信を枉げざりき。かく、放逐の客として倫敦に假寓せるの間、少妹の同窓にして一珈琲店の娘ハリエットを憐んで之と結婚せり。若き夫婦は、貧困の故に止むなく英國の北地ウエールス地方に漂浪せしが、此間に於ても、流石に思索研究の念は捨てず、少なからず小品の詩を綴りぬ。

かくて過せる中、至誠なる彼が博愛的精神は端なくも時の名士ウィリヤム、ゴド井ンの知る所となり、常にその家庭に出入してありき。然るに一千八百十三年六月、妻のハリエットが一子エリザを生むに至り、財政の窮迫、感情の衝突によりて家庭の平和を紊し、つひにハリエットを離婚するに至れり。間も

なく、ゴド井ンの女メリー、ゴド井ンを妻となしぬ、之れかの有名なる「フランケシスタイン」の作者シユレー女史なり。

此頃よりシユレーは、稍健康を害ひたりしを以て、轉地療養をなすべく歐州を漫遊し、瑞西に於てバイロンと深き交を結ぶに至れり、彼が燃ゆるが如き熱誠と、大膽なる革命主義とは、接する人々を魅する魔力を有せりといふ。

漫遊の途より歸國せし時、彼は、彼の前妻ハリエットの自殺を耳にして驚きぬ。孤兒を引取りて養育せんと謀りしも能はざりき、彼は怒りぬ、泣きぬ、悶えぬ、而して再び倫敦を去りて飄然伊太利に遊び、羅馬府に假寓して作詩に耽り、此處にして其の一代の傑作を著しぬ。されど、あゝされど、天はこの大詩人に齡せしめざりき、一千八百廿三年七月の始め、レケホオンより小艇にての歸途、偶、颶風にあつて果敢なくスペッチャ灣の藻屑と消えぬ。時に年僅に三十歳。

シエレー彼は、十五歳にして早くも小説に筆を染めしが、詩歌はその以前より作せしといふ、一千八百十三年「仙女王マリア」成り、十五年「テオムス」を溯つて山水の風光に接し、雄篇「アラスタ」成る、幽邃にして崇高なる天然は彼が詩筆によつてよく靈寫せられたり、之と共に千八百十七年の作に係る「レボルト、オプ、イスラム」は、一面彼が自叙傳とも見るべきものたるなり。彼が二大傑作たる「プロメシアス、アンパウンド」及び「ゼ、センシ」は共に一千八百十九年中の作なり。彼自ら「小生の最も缺點なき作」となせし「アドナイス」は同廿年に成りしもの、此外、彼が作には、「有情の草木」<sup>ゼ、センシ、チ、プ、アラント</sup>「雲雀」西風等の如き短篇少なからず、思想の清寫、詞調の幽遠、抒情の神筆、眞に千古の傑作なりと稱せらる。

シエレー彼は、革命的抒情詩人なり、夢想的主觀詩人なり、彼は勇猛不退轉の詩人なり、彼が詩に横溢せる精神は、地上を離れて天上の靈に浴せんとする偉なる渴仰心なり、彼曾て曰く「詩は最幸最善なる心の最幸最善なる時の記録なり」と、是れ彼が明確なる告白なり。ドウテン氏が彼の詩を評せし語に曰く、「シエレーは神興の白熱を以てその詩を作為す、光焰萬丈、生氣辭句にあふる、眞、天馬の天空を奔るが如し」と。彼逝きてこゝに八十年、未だ彼の如き眞詩人出でず。噫。

## 目 次

---

雲の歌。	The Cloud. ....	1
歌。	A Song. ....	15
斷篇。一	Fragment I. ....	17
斷篇。二	„ II. ....	17
斷篇。三	„ III. ....	18
斷篇。四	„ IV. ....	19
凋莖に與ふ。	Song, on a Faded Violet. ....	21
古年を送る歌。	Dirge for the Year. ....	23
雲雀に與ふ。	To a Skylark. ....	27
死。	Death. ....	42
戀の哲學。	Loves Philosophy. ....	45
哀歌。	A Lament. ....	47
エフ、デーに寄す。	To F.G. ....	50
哀歌。	A Lament. ....	51
燃ゆる灯皿の。	Lines. ....	53
無常。	Mutability. ....	57
秋哀歌。	Autumn; A Dirge. ....	60
駈落。	The Fugitives. ....	64
歡喜に與ふる歌。	Song. ....	72
月に與ふ。	To the Moon. ....	78
批評家に與ふ。	Lines to a Critic. ....	80
ひかりの翼。	The World's Wanderers. ....	83

*“ Rise like lions after slumber  
 In unvanquishable number!  
 Shake your chains to earth, like dew  
 Which in sleep had fall'n on you:  
 Ye are many—They are few.”*

つめたき地は。	Lines. ....	85
夜に與ふ。	To Night. ....	89
アレシューサ。	Arethusa. ....	94
日は暖かに。	Stanzas. ....	104
六絃琴に合して歌ふ手弱女に。	.....	
.....	An Ariette for Music. ....	110
わが心の女王に與ふ。	To the Queen of My Heart. ....	113
過去。	The Past. ....	118
——に與ふ。	To——. ....	120
哀歌。	The Dirge. ....	122
自由。	Liberty. ....	125
西風に與ふる歌。	Ode to the West Wind. ....	128

*“ Nothing of him that doth fade,  
 But doth suffer a sea-change  
 Into something rich and strange.”*

シェレ一の詩

小原無絃譯

雲の歌

われは大海、細流より、  
渴ける花にそゝがんと、  
すゝしき雨を齎しつ、  
われはかすけき影を垂れ、

The Cloud.

I bring fresh showers  
For the thirsting flowers,  
From the seas and the streams;  
I bear light shade

眞晝の夢によこたはる  
木々の瑞葉をかばふかな。  
あはれ、雌鳥は天つ日の  
光をあびて踊れども、  
あはれ、やすらに垂乳根の  
胸なほありと思ひつゝ、  
醒めぬゆかしきその雛を  
ひとつづつにおこさんと  
われ翼より露散らす。  
われは霞の連枷を

For the leaves when laid  
In their noonday dreams  
From my wings are shaken  
The dews that waken  
The sweet birds every one,  
When rocked to rest  
On their mother's breast,  
As she dances about the sun.  
I wield the flail  
Of the lashing hail,

發矢くと打ち振りて、  
みどりの野をば白う染め、  
雨とふりてはそを溶かし、  
雷と過ぎては笑ふかな。  
われが下界の山々に  
雪を篩へばそゝり立つ  
松の大木はさながらに  
魑魅の如く呻吟くなり。  
疾風の腕にわが眠る

And whiten the green plains under,  
And then again  
I dissolve it in rain,  
And laugh as I pass in thunder.  
I sift the snow  
On the mountains below,  
And their great pines groan aghast;  
And all the night  
'Tis my pillow white,  
While I sleep in the arms of the blast.

夜の枕はたゞ白し。  
空なる園の高臺には  
いと嚴めしく道導  
電光こそすはるなれ。  
下の洞には鳴神の  
桎梏められて時じくも  
身をばもがきつ、吼ゆるなり。  
和田津海越え、山越えて  
歩調しづかに道しるべ、  
むらさき立てる海原の

Sublime on the towers  
Of my skiey bowers,  
Lightning my plot sits,  
In a cavern under  
Is fettered the thunder,  
It struggles and howls at fits;  
Over earth and ocean,  
With gentle motion,  
This plot is guiding me,  
Lured by the love  
Of the genii that move

底を行きかふ守神等の  
愛にさそはれ、惑ひつゝ、  
われを導き過ぐるかな。  
細流、斷崖、または丘、  
さては湖、はた野原、  
彼れが夢みる何處にも  
山のふもとに、小川べに  
彼れがいとしむ神靈あり。  
あゝ、彼れ雨と溶ゝるとき、  
われは御空のみどりなる

In the depth of the purple sea ;  
Over the rills,  
And the crags, and the hills,  
Over the lakes and the plaines,  
Wherever he dream,  
Under mountain or stream,  
The Spirit he loves remains ;  
And I all the while  
Bask in heaven's blue smile,  
Whilst he is dissolving in rains.

ゑまひに背をば暄すかな。

ありあけ、星の消ゆるとき、

茜射す日は流星の

まなこを開き、燃え立てる

翼を張りてわが翔ける

雲の背にこそ飛び移れ。

さまさながらに地震ふりて

ゆらぎて裂くる断崖の

角にしばらく金色の

羽の光を放ちつゝ、

やすめる鷲に似たるかな。

下界の照れる海面より

夕日、休息と愛情の

あつき心を息吹きつゝ、

仰げば深き御空より

深紅の衣の落ちんとき、

われは翼をおさめつゝ、

卵を抱く鳩のごと

いともしづかに身をとめて、

An eagle alit

One moment may sit

In the light of its golden wings.

And when sunset may breathe,

From the lit sea beneath,

Its ardours of rest and of love,

All the crimson pall

Of eve may fall

From the depth of heaven above,

With wings folded I rest,

On mine airy nest,

( 7 )

The sanguine sunrise,

With his meteor eyes,

And his burning plumes outspread,

Leaps on the back

Of my sailing rack,

When the morning star shines dead.

As on the jag

Of a mountain crag,

Which an earthquake rocks and swings,

( 6 )



わがうすぎぬの翠帳を  
破るいたゞき何處にも  
星はひそかに窺ひて  
嫦娥の行衛をのぞむなり。  
しづかなる川海、淡海  
さながら高き裂け目より  
落ちたる空の断片のごと、  
月と星との光をば  
鋪きて炫ゆるにいたるまで、  
あゝ、われ風の造りたる

May have broken the woof

Of my tent's thin roof,

The stars peep behind her and peer ;

And I laugh to see

Them whirl and flee,

Like a swarm of golden bees,

When I widen the rent

In my wind-built tent,

Till the calm rivers, lakes, and seas,

天つ浮巢にいこふかな。  
塵の世人が嫦娥と呼ぶ  
ほのほ真白く輝ける  
かの球なせる少女子は  
そよ吹く夜半の風に連れ、  
羊毛なせるわが床を  
きらめきつゝも進むかな。  
足こそ見えね、天使の  
ひとり聴くてふ登音が

As still as a brooding dove.

That orbèd maiden

With white fire laden,

Whom mortals call the moon,

Glides glimmering o'er

My fleece-like floor

By the midnight breezes strewn ;

And wherever the heat

Of her unseen feet,

Which only the angels hear,

忽ち暗く煌星も  
ひかりかすかに蹠蹠きつ。  
岬より岬に橋なして、  
波はさか捲く和田の面に  
われ、屋根のごと目を掩へば、  
もろ山々ぞまる柱。  
大氣の力、わがそばに  
柱楷めらるゝそのみぎり、  
われは嵐と火と雪と  
ともに過ぎ行く凱旋門、

When the whirlwinds my banner unfurl.

From cape to cape,  
With a bridge-like shape,  
Over a torent sea,  
Sunbeam-proof,  
I hang like a roof,  
The mountains its columns be.  
The triumphal arch  
Through which I march  
With hurricane, fire, and snow,

とばりの裂け目かき分けて  
黄金の蜂の群れのひと  
狂ひ飛びかふ煌星を  
見つゝわれこそ笑ふなれ。  
燃ゆる帯もて日の玉座、  
珠の紐もて月の玉座  
われは結びつ。もしも彼の  
旋風ひとたびわが旗を  
翻へしなば火の山も

Like strips of the sky

Fallen through me on ligh,  
Are each paved with the moon and these.

I bind the sun's throne  
With a burning zone,  
And the moon's with a girdle of pearl;  
The volcanoes are dim,  
And the stars reel and swim,

われは變れど死なじかし。  
もし、雨霽れて穹窿に  
たゞ一點の塵もなく、  
そよ吹く風と天つ日が  
御空に高く御殿を  
築きなしたるその時よ、  
われはひそかにわが碑を  
見てほゝるゑみの堪へがてに、  
胎より出る兒のごと、  
墓より出づる魂のごと

I change, but I cannot die.  
For after the rain  
When with never a stain,  
The pavilion of heaven is bare,  
And the winds and sunbeams  
With their convex gleams,  
Build up the blue dome of air,  
I silently laugh  
At my own cenotaph,  
And out of the caverns of rain,

そは色しげき彩の虹。  
あゝ、霑ほへる下つ世の  
地ほのかにも笑ふとき、  
御空に高く天つ日は  
うすき色をぞ織り出づる。  
われこそ地と水の女兒、  
天つ御空の寵兒なれ。  
大海原や海ぎはの  
竅をば過ぎてわれは行く。

When the powers of the air  
Are chained to my chair,  
Is the million-coloured bow :  
The sphere-fire above  
Its soft colours wove,  
While the moist earth was laughing  
below.  
I am the daughter  
Of earth and water,  
And the nursling of the sky ;  
I pass through the pores  
Of the ocean and shores ;

歌

一

冬の梢にやもめ鳥

雄鳥思うて悲めば、

凍れる風は天を這ひ、

凍る細流は地を這ふ。

A Song.

I.

A widow bird sate mourning for her love

Upon a wintry bough ;

The frozen wind crept on above,

The freezing stream below.

雨の洞より立ち出で、  
その御殿をくづすかな。

Like a child from the womb,

Like a ghost from tomb

I arise and unbuild it again

斷篇 (二)

あはれ、羅馬は亡びたり、  
それとも分かぬ舊墟の  
たい山なすを君も見む—  
自然はひとり衰へず。

Fragment I.

Rome has fallen ; ye see it lying  
Heaped in undistinguished ruin ;—  
Nature is alone undying.

Fragment II.

斷篇 (一)

枯れたる森に木の葉なく、  
野をきはむるも花はなく、  
空にそよとの風もなく、  
たい音なふは水ぐるま。

二

II.

There was no leaf upon the forest bare,  
No flower upon the ground,  
And little motion in the air  
Except the mill-wheel's sound.

嬰兒は胎にいこひて、

亡骸は墓にやすらふ—

終りこそ始めなれ。

斷篇 (三)

さびしき風は歌へども、

かなしき歌は途絶えたり、

あゝ、接吻の痕見れば、

寒き蛆こそ這ひまはれ。

The babe is at peace within the womb,

The corpse is at rest within the tomb—

We begin in what we end.

Fragment III.

The rude wind is singing

The dirge of the music dead,

The cold worms are clinging

Where kisses were lately fed.

斷篇 (四)

われ、王たるを願はんや、

さらでも愁ひ深き身や。

權勢にいたる途あらく

峻しく、空に風狂ふ。

あゝ、日ざかりの高空や、

運命の日には融けはつる

氷の上の大御座、

すめらみことの大御座、

Fragment IV.

I would not be a king—enough

Of woe it is to love,

The path to power is steep and rough,

And tempeste reign above.

I would not climb the imperial throne;

'Tis built on ice which fortune's sun

凋<sup>か</sup>れてむなしきその花は  
 花<sup>はな</sup>より薫<sup>かき</sup>は失<sup>う</sup>せにけり。  
 君<sup>きみ</sup>、たい君<sup>きみ</sup>に息<sup>いき</sup>吹<sup>ふ</sup>きてし  
 花<sup>はな</sup>より色<sup>いろ</sup>は消<sup>き</sup>えにけり、  
 われを仰<sup>あや</sup>ぎてゑまひてし  
 君<sup>きみ</sup>がゆかしき眼<sup>め</sup>の如<sup>ごと</sup>く、

凋<sup>か</sup>萎<sup>れ</sup>に與<sup>あ</sup>ふ

Song, on a Faded Violet.

The odour from the flower is gone,  
 Which like thy kisses breathed on me;  
 The colour from the flower is flown,  
 Which glowed of thee, and only thee!  
 A shrivelled, lifeless, vacant form,

攀<sup>のぼ</sup>るをわれは願<sup>ねが</sup>はじよ。  
 さらばよ、王<sup>きみ</sup>よ。われひとり、  
 ひとりしあれば煩<sup>わづら</sup>ひの  
 し加<sup>す</sup>速<sup>はや</sup>かに來<sup>く</sup>べけんや。  
 王<sup>きみ</sup>、王<sup>きみ</sup>たれや、われ遠<sup>とほ</sup>く  
 羊<sup>ひつじ</sup>のむれを守<sup>まも</sup>りつゝ、  
 ヒマ<sup>ひま</sup>ラ<sup>ら</sup>ヤ<sup>や</sup>山<sup>さん</sup>に入<sup>い</sup>りてまし。

Thaws in the height of noon.

Then farewell, king; yet were I one,  
 Care would not come so soon.  
 Would he and I were far away,  
 Keeping flocks on Himalay.

そゝろ狂へるわが胸に  
 懸りてあれど冷やかや、  
 今もかはらずほの燃ゆる  
 人のこゝろを嗤ふめり。  
 われ泣くともわが涙  
 よみがへし得じ、歎くとも  
 ふたゝびわれに息吹かんや。  
 言はずうらまぬ運命こそ  
 われに廻りて来るべけれ。

It lies on my abandoned breast,  
 And mocks the heart which yet is warm  
 With cold and silent rest.  
 I weep—my tears revive it not!  
 I sigh—it breathes no more on me;  
 Its mute and uncomplaining lot  
 Is such as mine should be.

古年を送る歌

一千八百二十一年一月一日

親なき時よ、年は死にたり、  
 いざ来て歎け、いざ来て泣けよ。  
 たのしき時ぞほのかに笑ふ、  
 古年はたゞねむれるのみよ。  
 見よ、けうとげにほゝるみながら、  
 汝が時じくも泣くを嘲る。

Dirge for the Year.

I.  
 Orphan hours, the year is dead,  
 Come and sigh, come and weep!  
 Merry hours, smile instead,  
 For the year is but asleep.  
 See, it smiles as it is sleeping,  
 Mocking your untimely weeping.



三月は狂ひうめくも悲し、  
 二月は柩もろ手にさゝげ、  
 此處にさながら墓へ墓守、  
 ほのかに白き一月は今

四

すさめる日々  
 の息吹によりて  
 年こそゆらげ  
 静かなれかし、  
 をのく時よ、  
 年はその眼に  
 あらたの愛をたゝえて  
 起たむ。

So the breath of these rude days  
 Rocks the year :—he calm and mild,  
 Trembling hours, she will arise  
 With new love within her eyes.

IV.

January grey is here,  
 Like sexton by her grave :  
 February bears the bier,  
 March with grief doth howl and rave,

あゝ、地震ふりて地の底なる  
 柩の骸ゆらぐが如く、  
 白き三冬は荒き乳母かや、  
 死寒き古年今日こそゆらげ。  
 肅けき時よ、衣まとへる  
 汝が垂乳根を高く呼ばへよ。  
 風さらくと梢を度り、  
 兒の搖籃のゆらぐが如く

三

II.  
 As an earthquake rocks a corse  
 In its coffin in the cray,  
 So white winter, that rough nurse,  
 Rocks the death-cold year to-day ;  
 Solemn hour ! wait aloud  
 For Your mother in her shroud.

III.

As the wild air stirs and sways  
 The tree-swung cradle of a child,

雲くもか、霧かすみか、御み空そらより  
 汝なはとしこへに鳥とりならじ、  
 よくこそ來きませ、幸さいら魂たまよ、  
 あふる、胸むねのよろこびを  
 たくみ構かまへぬ歌うたとして  
 いと誇ほこりかにそゝぐ哉や。

雲雀に與ふ

To a Skylark.

Hail to thee, blithe spirit!

Bird thou never wert

That from heaven, or near it,

Pourest thy full heart

In profuse strains of unpremeditated art.

四月は泣けどーおゝ汝なれ、時ときよ、  
 五月の美うまし花はなこそつゞけ。

And April weeps—but, O ye house,

Follow with May's fairest flowers.

January 1st, 1821.

汝<sup>な</sup>は 天<sup>あま</sup>つ 御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>の 星<sup>ほし</sup>の ごと  
 汝<sup>な</sup>が 羽<sup>は</sup>ば た きに 融<sup>と</sup>け 去<sup>さ</sup>れ ば  
 ほ の むら さき の 夕<sup>ゆふ</sup>影<sup>かげ</sup>の  
 今<sup>いま</sup>し あだ かも 飛<sup>と</sup>び そめ し  
 骸<sup>から</sup>な き 快<sup>け</sup>楽<sup>らく</sup>さ な がら に。  
 鋭<sup>と</sup>き 歡<sup>よろこ</sup>樂<sup>び</sup>は 聞<sup>き</sup>こゆ なり、  
 汝<sup>な</sup>れ は 見<sup>み</sup>え ね ど し か す が に

Thon dost float and run ;  
 Like an unbodied joy whose race is just begun.  
 The pale purple even  
 Melts around thy flight ;  
 Like a star of heaven,  
 In the broad daylight  
 Thou art unseen, but yet I hear thy shrill delight,

地<sup>つち</sup>を は なれ て いや 高<sup>たか</sup>く、  
 炎<sup>ほのほ</sup>の 雲<sup>くも</sup>も さな がら に  
 な ほ い や 高<sup>たか</sup>く 昇<sup>のぼ</sup>り て は  
 青<sup>あほ</sup>空<sup>そら</sup>深<sup>ふか</sup>く 汝<sup>な</sup>れ は 飛<sup>と</sup>ぶ、  
 翺<sup>か</sup>けり て な ほ も 歌<sup>うた</sup>ひ つ、  
 歌<sup>うた</sup>ひ て と は に 翺<sup>か</sup>けり つ、  
 黄<sup>こが</sup>金<sup>ね</sup>ま ば ゆ く 落<sup>お</sup>つ る 日<sup>ひ</sup>に  
 彩<sup>あや</sup>雲<sup>ぐも</sup>ひ か り か い や け ば  
 そ の か い や け る 空<sup>そら</sup>高<sup>たか</sup>く

Higher still and higher  
 From the earth thou springest  
 Like a cloud of fire ;  
 The blue deep thou wingest,  
 And singing still dost soar, and soaring  
 ever singest.  
 In the golden lightning  
 Of the sunken sun,  
 O'er which clouds are brightning,

月つきが光ひかりをふる雨あめと  
 そゝぎて空そらに充みたすごと  
 汝ながひゞきこそ天地あめつちに  
 聲こゑいと高たかくあふるなれ。  
 汝なれそも何なにか、はた何なにに  
 いとも似にたるか、知しらねども、  
 虹にじうるはしき雲くも間まより  
 見みる眼めまばゆき露つゆながし  
 汝ながある高たかき御み空そらより

As, when night is bare,  
 From one lonely cloud  
 The moon rains ont her beams and heaven is  
 overflowed.  
 What thou art we know not ;  
 What is most like thee ?  
 From rainbow clouds there flow not  
 Drops so bright to see,

かの白銀しろかねの明星めいせいの  
 ふす矢やよりなほするどけれ、  
 あはれ、するどき天燈あまかしは  
 曉あけの御空みそらに燃えほそり、  
 つひには見みえず、たゞ其處そこに  
 ありてふとを覺おぼゆのみ。  
 夜よるほがらかに澄すめるとき、  
 たゞ一片ひとひらの雲間くもまより

Keen as are the arrows  
 Of that silver sphere,  
 Whose intense lamp narrows  
 In the white dawn clear,  
 Until we hardly see, we feel that it is there.  
 All the earth and air  
 With thy voice is loud,

音<sup>ね</sup>樂<sup>がく</sup>ひ<sup>い</sup>きあふるゝに、  
 戀<sup>こひ</sup>になやめる和<sup>にぎ</sup>魂<sup>たま</sup>を  
 ひとりひそかに和<sup>なだ</sup>めつゝ、  
 玉<sup>たま</sup>のうてなのおばしまに  
 倚<sup>よ</sup>りそふ姫<sup>ひめ</sup>に似<sup>に</sup>たるかな。  
 花<sup>はな</sup>間<sup>ま</sup>、草<sup>くさ</sup>間<sup>ま</sup>の蔭<sup>かげ</sup>深<sup>ふか</sup>く  
 見<sup>み</sup>えみ、見<sup>み</sup>えずみ、谷<sup>たに</sup>川<sup>がは</sup>の  
 露<sup>つゆ</sup>のまがひに潜<sup>ひそ</sup>みつゝ、  
 むなしき色<sup>いろ</sup>をほのかにも

In a palace tower,  
 Soothing her love-laden  
 Soul in secret hour  
 With music sweet as love, which overflows  
 her bower :

Like a glow-worm golden  
 In a dell of dew,  
 Scattering unbeholden  
 Its aëreal hue

歌<sup>うた</sup>の雨<sup>あめ</sup>をばふらすかな。  
 あはれ、希望<sup>のぞみ</sup>はいと清<sup>ま</sup>く、  
 あはれ、恐怖<sup>おそ</sup>はあとを絶<sup>た</sup>ち、  
 世<sup>よ</sup>は博<sup>はく</sup>愛<sup>あい</sup>の世<sup>よ</sup>たるまで、  
 天<sup>あま</sup>ほぐ歌<sup>うた</sup>をうたひつゝ、  
 胸<sup>むね</sup>のおもひの光<sup>ひかり</sup>明<sup>あ</sup>りに  
 ひそむ詩<sup>し</sup>人<sup>に</sup>に似<sup>に</sup>たるかな。  
 愛<sup>あい</sup>にも似<sup>に</sup>たるなつかしの

As from thy presence showers a rain of melody.

Like a poet hidden

In the light of thought,

Singing hymns unbidden,

Till the world is wrought

To sympathy with hopes and fears it heeded not :

Like a high-born maiden

さ ば かり 聖き よろこび の  
 な ど 汝が 胸の ゆかしき や。  
 教へよ、 魂か、 はた鳥か。  
 今、 汝が 樂に 優らじよ。  
 こゝろよ かりしものも 皆、  
 そのかみ、 清く、 爽かに、  
 ふるや、 彌生の 雨の 音、  
 露にさめたる 新花に、  
 ほのめき 炫ゆる 若草に、

Sound of vernal showers  
 On the twinkling grass,  
 Rain-awakened flowers,  
 All that ever was  
 Joyous, and clear, and fresh, thy music  
 doth surpass :  
 Teach us, sprite or bird,  
 What sweet thoughts are thine :  
 I have never heard,

放つ 黄金の 光ある  
 かの 螢火に 似たるかな。  
 羽おもげなる 暖風の、  
 くゆる 薫りの なかくに  
 心もそらの うれしさに  
 倦んじながら も戀ひ寄れば、  
 瑞葉みどりの 木がくれに  
 こぼる、 薔薇に 似たるかな。

Among the flowers and grass, which screen  
 it from the view :

Like a rose embowered  
 In its own green leaves,  
 By warm winds deflowered,  
 Till the scent it gives  
 Makes faint with too much sweet these  
 heavy-winged thieves :

汝が幸おほき歌の音の  
 そもや、泉は何なりや。  
 野原か、海か、はた山か。  
 かたち如何なる空なりや。  
 汝が世の戀は何なりや。  
 なやみなき汝は何なりや。  
 汝が鋭き清きよろこびの  
 倦んずることのあるべしや。

What objects are the fountains

Of thy happy strain?

What fields, or waves, or mountains?

What shapes of sky or plain?

What love of thine own kind? What  
ignorance of pain?

With thy clear keen joyance

Langour cannot be:

流れを高くみなぎらす  
 戀、はた酒のほぎ歌を  
 聞きたることはあらしかし。  
 ヒメニールの合唱も、  
 勝ちほこりたる凱歌も  
 汝がひと聲にくらぶれば  
 いづれ虚しき榮華のみ、  
 何、もの足らぬひとことの  
 あるてふ如く覺ゆなり。

Praise of love or wine

That panted forth a flood of rapture so divine.

Chorus Hymenœal,

Or triumphal chaunt,

Matched with thine would be all

But an empty vaunt,

A thing wherein we feel there is some  
hidden want.

さもあれ、よしや、われ、憎み、

そのかみ惚び、末思ひ、  
あらぬを傷みかなしむよ。  
いつはりならぬ微笑にも  
憂き煩らひはひそめるよ。  
ゆかしき歌はかなしみの  
思想を語るそれなれや。

汝が歌いかで流し得む。

Or how could thy notes flow in such a  
crystal stream?

We look before and after,  
And pine for what is not:  
Our sincerest laughter  
With some pain is fraught;  
Our sweetest songs are those that tell of  
saddest thought.

Yet if we could scorn

煩ひの影とこしへに  
汝がそば近く来るべしや。  
汝がする戀にあさましき、  
かなしき果のあらぬ哉。  
夢か、うつゝか、汝れはしも、  
浮世の人の夢むより  
深く、忠實なるものをこそ  
死につき想ひ度るなれ。  
さらすば瑠璃の流れをば

Shadow of annoyance

Never came near thee:

Thou lovest; but ne'er knew love's sad satiety.

Waking or asleep,

Thou of death must deem

Things more true and deep

Than we mortals dream,



歌は詩人の欲るところ、  
あゝ、汝れ、世をば嘲るか。  
もちて生れし歡樂の  
半ばをわれに教へよや、  
さらむやさしき物狂ひ、  
もし、わが唇を流れなば、  
われ、今こゝに聴くがごと、  
世もまた耳を敬てむかな。

Thy skill to poet were, thou scorner  
of the ground!

Teach me half the gladness  
That thy brain must know,  
Such harmonious madness  
From my lips would flow,  
The world should listen then, as  
I am listening now.

ほこり、恐怖をあざけるも、  
よしや、涙を垂るゝなき  
ものと生るゝことあるも、  
いかでか汝れがたのしみに  
近づくことを知るべしや。  
あるとあらゆる歡喜の  
節なす聲にいや優さる、  
書に見えたるもろくの  
玉の寶にいや優さる

Hate, and pride, and fear,  
If we were things born  
Not to shed a tear,  
I know not how thy joy we ever should  
come near.

Better than all measures  
Of delightful sound,  
Better than all treasures  
That in books are found,

死

こゝに、かしこに死は絶えず、  
死はいづこにもいそがはし、  
まはりに、うちに、下に、はた  
上にも死あり——人は死よ。

人にも、人の思ひにも、  
人の智慧にも、恐怖にも

死は焼印をおせるかな。

\* \* \* \*

人の快樂ぞまづほろび、  
希望、恐怖もほろびては、  
負債をはらふ時來るも、  
塵は塵なり——人も死ぬ。  
愛でいつくしむもの皆も  
人の身のごと消え失せつ、

~~~~~  
On all we know and all we fear,

\* \* \* \*

First our pleasures die—and then  
Our hopes, and then our fears—and when  
These are dead, the debt is due,  
Dust claims dust—and we die too.

All things that we love and cherish,  
Like ourselves must fade and perish,

~~~~~  
Death.

Death is here and death is there,  
Death is busy everywhere,  
All around, within, beneath,  
Above is death—and we are death.

Death has set his mark and seal  
On all we are and all we feel,

かゝる運命の世にしあれば  
人死なずとも愛死なむ。

Such is our rude mortal lot,

Love itself would, did they not.

戀の哲學

泉は河と、河は大洋と  
末はひとつの水となる。  
御空の風はなつかしき  
なさけと永久に通ふなり。  
何か、この世にひとりなる。  
もの皆、聖き法により  
かたみに合うて交はるに、

Love's Philosophy.

The fountains mingle with the river,

And the rivers with the ocean,

The winds of heaven mix for ever

With a sweet emotion;

Nothing in the world is single;

All things by a law divine

In one another's being mingle—

夏の去るよりいや疾く、  
 わかき樂よりいや疾く、  
 幸の夜よりいや疾く、  
 汝れこそ來り、行けるなれ。  
 木の葉くちたる地のごと、  
 ねむり破れし夜のごと、  
 快樂行きたる心のごと、

哀歌

A Lament.

Swifter far than summer's flight,  
 Swifter far than youth's delight,  
 Swifter far than happy night,  
 Art thou come and gone:  
 As the earth when leaves are dead,  
 As the night when sleep is sped,  
 As the heart when joy is fled,

われのみひとり君を得ず。  
 山々、高き空接吻み、  
 波うち寄りてかき抱く。  
 あはれ、姉花も弟花をば  
 さげすむとは宥されじ。  
 日光、地をかき抱き、  
 月影、海を接吻めども、  
 君もしわれを接吻ますば  
 このくちつけも何かせん。

Why not I with thine?

See the mountains kiss high heaven,  
 And the waves clasp one another;  
 No sister flower would be forgiven  
 If it disdained its brother:  
 And the sunlight clasps the earth,  
 And the moonbeams kiss the sea,  
 What are all these kissings worth,  
 If thou kiss not me?

January, 1820.

われのみ獨りさびしむよ。

燕の夏のまた來るも、

梟の夜のぞむとも、

鵝鳥のわかき世は汝れと

飛ぶをよろこぶつれなさよ。

こゝろは日ごと朝を戀ひ、

ねむりは憂さと變りつゝ、

わが冬あだに梢より

ひかりうらゝの葉を冒す。

I am left lone, alone.

The swallow Summer comes again,  
The owlet Night resumes her reign,  
But the wild swan Youth is fain  
To fly with thee, false as thou.  
My heart each day desires the morrow,  
Sleep itself is turned to sorrow,  
Vainly would my winter borrow  
Sunny leaves from any bough.

鴛鴦のふすまに百合の花、

刀自のかしらに薔薇の花、

亡き少女子にすみれ花、

三色堇ぞおのが花。

生きたる墓にさゝげては

涙をのみて撒き散らす、

あゝ、友をしてわがための

希望、恐怖を破らしめざれ。

Lilies for a bridal bed,

Roses for a matron's head,

Violets for a maiden dead,

Pansies let my flowers be:

On the living grave I bear,

Scatter them without a tear,

Let no friend, however dear,

Waste one hope, one fear for me.

エフ、ヂーに寄す

別離わかれのぞんでその聲ふるひぬ。  
さもわれ、その聲出でたる心の  
裂けしは知らねど、その時語れる  
言葉は記せねど、かくてぞ分れぬ。  
ういかな——あはれ、ういかな。  
この世は汝おがため廣きに過ぎたり。

To F. G.

Her voice did quiver as we parted,  
Yet knew I not that heart was broken  
From which it came, and I departed,  
Heeding not the words then spoken.  
Misery—O Misery,  
This world is all too wide for thee.

哀歌

あはれ、浮世よ、生命よ、時よ、  
去らんとすなるその足捉へ、  
をのゝきながら立盡したり。  
何時いつか、汝おが生なの光榮ひかりかへらん、  
かへらじ——あはれ、永久とこにかへらじ。

A Lament.

Oh, world! oh, life! oh, time!  
On whose last steps I chimb  
Trembling at that where  
I had stood before;  
When will return the glory of your prime?  
No more—O, never more!

Out of the day and night

晝ひると夜よより快樂けらくは行きぬ。

燃ゆる灯皿の碎けなば  
 光りは塵に消え失せむ。  
 御空の雲の散り盡かば  
 虹の彩こそかゝやかめ。  
 笛の歌口やぶれなば  
 ゆかしき節はのこらじよ。  
 聲、唇を漏れつらば。

燃ゆる灯皿の

Lines.

When the lamp is shattered  
 The light in the dust lies dead--  
 When the clond is scattered  
 The rainbow's glory is shed,  
 When the lute is broken,  
 Sweet tones are remembered not;  
 When the lips have spoken,

たのしき春も、夏も、三冬も、  
 わがかすかなる胸は揺らぎて、  
 愁ひもゆれど、あゝ、歡喜は  
 かへらじ——永久にかへらじ。

A joy has taken flight;

Fresh spring, and summer,  
 and winter hoar,  
 Move my faint heart with grief,  
 but with delight

No more—O, never more!

戀しきしらべ忘れむ。

樂の音、彩の、灯皿、笛

むかしにかへし得ぬがごと、

心ひやくも、たましひの

黙さば歌とならじかし、

歌とはならで悲歌となり、

荒磯の竅を吹く風か、

亡き船人とぶらひの

ものかなしげの濤に似む。

ひとたび心融け合は

戀は濃かの巢を去りて、

弱き人こそたゞひとり

失ひしもの忍ぶなれ。

この世のものゝ虚しきを

ひたも悲むおゝ、「戀」よ、

など汝は搖籃、家、柩に

むなしきものを選びしや。

When hearts have once mingled

Love first leaves the well-built nest,

The weak one is singled

To endure what it once possest.

O Love! who bewailest

The frailty of all things here,

Why choose you the frailest

For your cradle, your home and your bier?

Loved accent are soon forgot.

As music and splendour

Survive not the lamp and the lute,

The heart's echoes render

No song when the spirit is mute:

No song but sad dirges,

Like the wind through a ruined cell,

Or the mournful surges

That ring the dead seaman's knell.



ひかり炫ゆれとはかなしや。  
夜闇を嘲るいなづまか、  
この世の快樂、そもや何、  
人まどはして翺り去る。  
停まれといのるもの皆は  
明日は枯る。  
今日笑む花も

無常

Mutability.

The flower that smiles to-day  
To-morrow dies;  
All that we wish to stay,  
Tempt and then flies;  
What is this world's delight?  
Lightning that mocks the night,  
Brief even as bright.

その煩惱は雨風の  
鳥ゆるごと、汝れ揺らむ。  
そのことはりは冬空の  
日のごと、汝れを嘲けらむ。  
葉落ち、さむ風きたるとき、  
汝が巢の極みな朽ちて、  
汝が鷺の屋は見え透きつ、  
人の笑ふにゆだねらる。

Its passions will rock thee

As the storms rock the ravens on high:

Bright reason will mock thee,

Like the sun from a wintry sky.

From thy nest every rafter

Will rot, and thine eagle home

Leave the naked to laughter,

When leaves fall and cold winds come.

花きよく、  
晝をたのしくする夜の  
來ざるに、かはる眼の色や、  
静けき時の去らぬ間を、  
汝れは夢みよ——眠りより  
かくて覺めなば泣けよかし。

Whilst flowers are gay,  
Whilst eyes that change ere night  
Make glad the day;  
Whilst yet the calm hours creep,  
Dream thou—and from thy sleep  
Then wake to weep.

徳や、むなしく、  
信や、まれ。  
あゝ、戀、ほこる絶望に  
あはれの幸を賣るのみか。  
あゝ、人、やがてたほるゝも  
快樂や、おのがものと呼ぶ  
すべてを後にのこすかな。  
青空はれて、

Virtue, how frail it is!  
Friendship too rare!  
Love, how it sells poor bliss  
For proud despair!  
But we, though soon they fall,  
Survive their joy and all  
Which ours we call.

Whilst skies are blue and bright,

秋

哀歌

あたくしはかき日は薄れつゝ、  
 膚を噛む風うめきつゝ、  
 木の葉なき枝さやぎつゝ、  
 ほの白き花しほれつゝ、  
 年ははや、  
 臨終の床の地の上に

Autumn:

A Dirge.

The warm sun is failing,  
 The bleak wind is wailing,  
 The bare boughs are sighing,  
 The pale flowers are dying,  
 And the year  
 On the earth her deathbed,

朽葉のきぬに包まれて

ふしたりな。

いざ、月どもよ、いざ、行けよ、  
 十一月より五月まで  
 みな悲しげの列なして、  
 死にたる寒きふる年の  
 ひつぎ車に随へよ、  
 かぐろき影もさながらに  
 その墳塋のまもりせよ。

In a shroud of leaves dead,

Is lying.

Come, months, come away,

From November to May,

In your saddest array;

Follow the bier

Of the dead cold year,

And like dim shadows

watch by her sepulchre.

たのしき妹をなぐさめよ、  
死にたる寒きふる年の  
ひつぎ車に随へよ、  
やよや、涙をそゝぎては  
その墓石を青くせよ。

---

Let your light sisters play—  
Ye, follow the bier  
Of the dead cold year,  
And make her grave  
green with tear on tear.

膚さむき雨はふりつゝ、  
肉を喰む蛆は這ひつゝ、  
行く水の波さはぎつゝ、  
いかづちは震ひ鳴りつゝ、  
年おくる。  
たのしき燕飛び去りつゝ、  
蜥蜴はともに巢をとめて  
行きたりな。  
いざ、月どもよ、いざ、行けよ、  
白、黒、灰に着かざりて

---

The chill rain is falling,  
The nipt worm is crawling,  
The rivers are swelling,  
The thunder is knelling  
For the year ;  
The blithe swallows are flown,  
And the lizards each gone  
To his dwelling ;  
Come, months, come away ;  
Put on white, black, and grey,

旋風はためき、  
 いかづち響き、  
 森うちゆらぎ、  
 寺の鐘鳴る—  
 いざ來れ。  
 この世さながら、動きつゝ、  
 船まきちらす海原か。  
 鳥、けもの、人、蛆は皆  
 雨風をおそれ、這ひ伏しぬ—

The whirlwind is rolling,  
 The thunder is tolling,  
 The forest is swinging,  
 The minster bells ringing —  
 Come away !

The Earth is like Ocean,  
 Wreck-strewn and in motion :  
 Bird, beast, man and worm  
 I have crept out of the storm —

駈落  
 浪立ちさはぎ、  
 霰たばしり、  
 稻妻ひかり、  
 白沫とほく  
 をどる哉。

The Fugitives.

I.

The waters are flashing,  
 The white hail is dashing  
 The lightnings are glancing  
 The hoarspray is dancing  
 Away !

いざ來れ。

二

『われ等の舟に帆はひとつ。

舵手どもは青ざめぬ。

思ふに、たけき水先も

われ等のあとに附き來べし。』

男は呼びぬ。

女は呼びぬ。『橈たてよ。

Come away!

II.

“Our boat has one sail,  
And the helmsman is pale;  
A bold pilot I trow,  
Who should follow us now,”—  
Shouted He—

And she cried: “Ply the oar!

岸よりはやく漕ぎ出でよ。

死の矢、忽ち亂れ落ち

霞まじりに海原の

行手けがしぬ。

小島、あらゝぎ、いはほより

雲、燈臺をとざしたり。

疾風に音はあらねども、

大砲あかく風下に

光りきらめく。

Put off gaily from shore!"  
As she spoke, bolts of death  
Mixed with hail, specked their path  
O'er the sea.

And from isle, tower and rock,  
The blue beacon cloud broke,  
And though dumb in the blast,  
The red cannon flashed fast  
From the lee.

『汝れ、恐るゝや、怖るゝや。  
 はた、汝れ、見るや、汝れ、聞くや。  
 荒れ立ち狂ふ海原を  
 われ等は漕ぎぞわづらへる、  
 われと汝れとは。』

戀ひ、戀はれたる二人をば  
 舟の苦こそ掩ほひたれ。

かたみの血汐とけ合ひて  
 快樂をほこり囁きし  
 音こそ低くけれ。

怒濤山なす海原は  
 小やみだになく荒れ狂ひ、  
 ひきては寄せて碎けつゝ、  
 沈みはてゝは散りみだれ、  
 みだれ散るかな。

Their blood beats one measure,  
 They murmur proud pleasure  
 Soft and low ;  
 While around the lashed Ocean,  
 Like mountains in motion,  
 To withdrawn and uplifted,  
 Sunk, shattered and shifted  
 To and fro.

## III.

“ And, fear'st thou, and fear'st thou ?  
 And, seest thou, and hear'st thou ?  
 And, drive we not free  
 O'er the terrible sea,  
 I and thou ? ”  
 One boat-cloak did cover  
 The loved and the lover —

四

城の廣間に青ざめし  
乳母、さながらに獵犬の  
瘦せしが如く、そのそばに  
立つ花髻ははぢしめを  
恚れるさまや。

もの見櫓のいたゞきに  
死を預表す魂のごと、  
老いかたくなの父立てり、

荒るゝ天氣もその聲に  
なれたる如し。

子をし呼ばへば荒立てる  
言ひひてしを今もまた  
狂ふ疾風のうちながら、  
愛でいつくしむ女兒の  
名をぞ呼ぶなる。

To his voice the mad weather

Seems tame ;

And with curses as wild

As ere clung to child,

He devotes to the blast

The best, loveliest and last

Of his name !

IV.

In the court of the fortress

Beside the pale portress,

Like a bloodhound well beaten,

The bridegroom stands, eaten

By shame ;

On the topmost watch-turret,

As a death-boding spirit,

Stands the grey tyrant father,



歡喜に與ふる歌

まれ／＼に汝れこそ來れ、  
歡喜の化生のものよ。  
ながの日のこゝら夜晝、  
われひとり、など殘しゝや。  
ながの日のこゝら夜晝、  
倦んじたり、汝れの去りしに。

Song.

Rarely, rarely, comest thou,  
Spirit of Delight!  
Wherefore hast thou left one now  
Many a day and night?  
Many a weary night and day.  
'Tis since thou art fled away.

如何にせば、ふたゝび汝れを  
とこしへに、われ、羸ち得るぞ。  
ほだしなき、たのしき者と  
もろともに惱み嗤ふか。  
汝れはそも、あやしき精よ、  
忘れしや、いためる者を。  
うちゆらぐ木の葉の影に  
おちおそる蜥蜴の如く、  
愁ひをば汝れぞおそるゝ。

How shall ever one like me  
Win thee back again?  
With the joyous and the free  
Thou wilt scoff at pain.  
Spirit false! thou hast forgot  
All but those who need thee not.  
As a lizard with the shade  
Of a trembling leaf,  
Thou with sorrow art dismayed;

汝<sup>な</sup>が愛<sup>め</sup>づるもの、われは愛<sup>め</sup>づ、  
歡喜<sup>えんぎ</sup>の化生<sup>けいせい</sup>のものよ。  
若葉<sup>わがは</sup>もて装<sup>ま</sup>へる地<sup>つち</sup>や、  
星<sup>ほし</sup>きよく輝<sup>かがや</sup>く夜<sup>よ</sup>や、  
秋<sup>あき</sup>の夕<sup>ゆふ</sup>、黄金<sup>おうごん</sup>まばゆく  
天雲<sup>あまぐも</sup>のうまるゝ朝<sup>あさ</sup>や。  
雪<sup>ゆき</sup>を愛<sup>め</sup>で、きらめく霜<sup>しも</sup>の  
もろくの形<sup>かたち</sup>をも愛<sup>め</sup>づ。

I love all that thou lovest,  
Spirit of Delight!  
The fresh Earth in new leaves drest,  
And the starry night;  
Autumn evening, and the morn  
When the golden mists are born.  
I love snow, and all the forms  
Of the radiant frost:

悲<sup>かな</sup>みのなげかひだにも、  
寄<sup>よ</sup>りつかぬ汝<sup>な</sup>れをあざける、  
あざけるも汝<sup>な</sup>れは聞<sup>き</sup>かじよ。  
われをして樂<sup>たの</sup>しき歌<sup>うた</sup>に  
代<sup>か</sup>へしめよ、愁<sup>しみ</sup>ひの曲<sup>うま</sup>を。  
あはれみに汝<sup>な</sup>れは來<sup>き</sup>らじ、  
よろこびに汝<sup>な</sup>れは來<sup>き</sup>らじ、  
あはれみは然<sup>さ</sup>らば無<sup>な</sup>情<sup>なさ</sup>き  
羽<sup>は</sup>斷<sup>た</sup>む、汝<sup>な</sup>れといまらむ。

Even the sighs of grief  
Reproach thee, that thou art not near,  
And reproach thou wilt not hear.  
Let me set my mournful ditty  
To a merry measure,  
Thou wilt never come for pity,  
Thou wilt come for pleasure,  
Pity then will cut away  
Those cruel wings, and thou wilt stay.

愛づるかな、波、風、嵐、

何にまれ、「自然」のものは。

何にまれ、人の愁ひに

けがれざるものにしあらば。

ひとり居のやすき平和、

あゝ、静か、清く、正しき

世なりせばわれは愛づるよ。

汝れとわれ、何のちがひぞ。

さはれ、わが愛づといふより

獲まく欲るものを汝れもつ。

羽もちて、光りの如く

飛びもうる「愛」をぞ愛づる。

そはとまれ、あゝ、そはとまれ、

汝れをこそ愛づれ、化生よ。

汝れこそは愛よ、生命よ、

やよ、わが胸を汝が家となせよ。

The things I seek, not love them less,

I love Love—though he has wings,

And like light can flee,

But above all other things,

Spirit, I love thee —

Thou art love and life! O come,

Make once more my heart thy home.

I love waves, and winds, and storms,

Everything almost

Which is Nature's, and may be

Untainted by man's misery.

I love tranquil solitude,

And such society

As is quiet, wise and good ;

Between thee and me

What difference? but thou dost possess

月に與ふ

うまれことなる煌星の  
中をひとりのさすらひや、  
天を攀ぢつゝ、下界を  
見放くるわざに倦んじてや、  
汝れそも青うやつれしか—  
とはにうつろふそのさまは  
さながら、快樂なき眼の

To the Moon.

Art thou pale for weariness  
Of climbing heaven, and gazing on the earth,  
Wandering companionless  
Among the stars that have a different birth,—

ひとみ定めて視るほどの  
もの見出でぬに似たるかな。

And ever changing, like a joyless eye  
That finds no object worth its constancy?

批評家に與ふ

誰か、蠶より蜜を、黄なる  
蜂より絹をばあつめ得るぞ。  
わが胸、憎惡のやどるあらば  
冬の日小草の萌ゆるあらむ。

君子の口吻を籍るやから、  
憫みもとめて絶るやから、

汝がごと漫りに謗るやから、  
ひとつの智慧をばかつぎまはし  
わがごと憶せぬやから憎くや。

權力と黄金の奴隷もとめ、  
親しき心の友となせよ。  
汝が愛、つめたき固執者をば  
動かし得んとも、いかでわれを  
動かし得べきや、汝れが憎惡。

And men who rail like thee ;  
An equal passion to repay,—  
They are not coy like me.  
  
Or seek some slave of power and gold,  
To be thy dear heart's mate,  
Thy love will move that bigot cold,  
Sooner than me, thy hate.

Lines to a Critic.

Honey from silkworms who can gather,  
Or silk from the yellow bee?  
The grass may grow in winter weather,  
As soon as hate in me.

Hate men who cant, and men who pray,

われ今説きたり、そもや智恵の  
ひとつを奈何ぞ分ち得べき。  
われなど汝れをば憎むべしや、  
眞理と愛とのなきをこそ忌め。

A passion like the one I prove  
Cannot divided be ;  
I hate thy want of truth and love,  
How should I then hate thee ?

ひかりの翼

ひかりの翼、火の如く  
打ち振りかけるやよ、星よ。  
夜の如何なる洞窟ほらにして、  
汝なれはもろ羽はを閉づるかや。

家なき天路行きなやむ  
ほの青白きやよ、月よ。

The World's Wanderers.

Tell me, thou star, whose wings of light  
Speed thee in thy fiery flight,  
In what cavern of the night  
Will thy pinions close now ?

Tell me, moon, thou pale and grey  
Pilgrim of heaven's homeless way,

つめたき地は  
 つめたき地は下にいね、  
 つめたき天は上に照る。  
 死もさながらの夜の氣は  
 落ち行く月の下にして  
 寒きひいきを放ちつゝ  
 氷の岩窟、雪の野を  
 出で、あたりに流れ散る。

つめたき地は

Lines.

The cold earth slept below ;  
 Above the cold sky shone ;  
 And all around,  
 With a chilling sound,  
 From caves of ice and fields of snow,  
 The breath of night like death did flow  
 Benaath the sinking moon.

夜晝、何の深みにて。  
 汝れは眠りを覓むるや。  
 世に容れられぬ人のごと、  
 さすらひ倦みしやよ、風よ。  
 あはれ、汝れなほ、秘めの巢を  
 枝はた波にもてるかや。

In what depth of night or day  
 Seekest thou repose now ?

Weary wind, who wanderest  
 Like the world's rejected guest,  
 Hast thou still some secret nest  
 On the tree or billow ?

見入る汝が眼の匂ふなり。  
 行くとしもなき水の面に  
 沼の灯影のほのかにも  
 ひかるが如く月照りて、  
 夜風にふるふ汝が髪の毛の  
 ほつれ毛をこそ黄に染むれ。  
 月ぞ汝が唇青うする。  
 風ぞ汝が胸寒うする。  
 妹よ、夜ぞ汝がやさ額に

Of the moon's dying light ;  
 As a fen-fire's beam,  
 On a sluggish stream,  
 Gleams dimly—so the moon shone there,  
 And it yellowed the strings of thy tangled hair  
 That shook in the wind of night.

The moon made thy lips pale, beloved ;  
 The wind made thy bosom chill ;  
 The night did shed

冬の生垣くろすみて  
 みどりの草の痕もなし。  
 宿とたのみて鳥の寐る  
 荆棘あらはに枯れ落ちて  
 冴かへる霜の威もつよく  
 裂けし路べの裂け目には  
 もつれたる根の見ゆる哉。  
 月のうするゝ光りをば

The wintry hedge was black,  
 The green grass was not seen,  
 The birds did rest  
 On the bare thorn's breast,  
 Whose roots, beside the pathway track,  
 Had bound their folds o'er many a crack  
 Which the frost had made between.

Thine eyes glowed in the glare



凍れる露をそゝくなる。  
さえたる空の寒き氣が  
心のまゝに訪ひ寄らむ  
ところに汝れは囚りたり。

夜に與ふ

東や、霧のこむる洞穴より、  
夜のみ魂よ、

西の海原疾く越え行けよ。  
永き、さびしき終日、汝れが  
織りたる快樂、恐怖の夢ぞ  
おそろしく、はた懐しきかな。

疾く疾く翔れ。

To Night.

Swiftly walk over the western wave,  
Spirit of Night!  
Out of the misty eastern cave,  
Where, all the long and lone daylight,  
Thou wovest dreams of joy and fear,  
Which make thee terrible and dear,—  
Swift be thy flight!

On thy dear head

Its frozen dew, and thou didst lie  
Where the bitter breath of the naked sky  
Might visit thee at will.

November, 1815.

星織り込める白き被衣かっぴに

汝なが身をつゝめ。

垂髪長う晝の眼とざせ。

晝を接吻くみて倦うみ果てしめよ。

かくて市、海、陸越え行いて

人をば酔はす汝なが鞭觸むれよ。

來よ、われ待ちぬ。

われ起き出で、曙見ては

汝なれをぞ戀ふる。

天つ日のぼり、露消え失せて

日盛ひり重く花枝に眠りつ、

忌まるゝ人の如く倦うんせる

晝ためらうて沈み行くとき、

汝なれをぞ戀ふる。

汝なが弟あになる死は來て叫ぶ、

われを願ふや。

汝がよき子なるほそ目の「眠」、

I sighed for thee :

When light rode high, and the dew was gone,  
And noon lay heavy on flower and tree,  
Lingering like an unloved guest,

I sighed for thee.

Thy brother Death came, and cried

Wouldst thou me?

Thy sweet child Sleep, the filmy-eyed,

Wrapt thy from in a mantle grey,

Star-inwrought!

Blind with thine hair the eyes of day,

Kiss her until she be wearied out,

Then wander o'er city, and sea, and land,

Touching all with thine opiate wand —

Come, long sought!

When I arose and saw the dawn,

と谷て言ふ愛語の身を具へ

十一

けはひ真近きもろ羽はいたき、  
疾く疾く來れ。

Swift be thine approaching flight.  
Come soon, soon!

真晝の蜂はさゝやき似たり、  
汝がへにわれは巢を營まんか。  
われを願ふや。われは答へぬ、  
いな、汝れならじ。  
汝が死なるとき「死」は疾く來べし、  
あまりにはやく——  
汝が去らるとき「眠」は來べし。  
あゝ、賜物をわれは乞はじよ。  
汝れに乞はじよ、戀しき「夜」よ——

Murmured like a noontide bee,  
Shall I nestle near thy side?  
Wouldst thou me?—And I replied  
No, not thee!

Death will come when thou art dead,  
Soon, too soon—  
Sleep will come when thou art fled;  
Of neither would I ask the boon  
I ask of thee, beloved Night—

アレシューサ

水の女神のアレシューサ、  
アクロセローンの深山なる  
深雪の床を立ち出でつ、  
雲より、あるは、岩が根の  
こゝしき崖の真上より、  
光る泉を牧りつゝ、  
虹とにはへる垂髪を

Arethusa.

Arethusa arose  
From her couch of snows  
In the Acroceraunian mountains,—  
From cloud and from crag,  
With many a jag,  
Shepherding her bright fountains.  
She leapt down the rocks

細流の水にまかせつゝ、  
岩うち越えて馳せ降る。  
西の光りにそゝり立つ  
峽も神のあしあとに  
崩ゆるみどりの深きかな。  
ひた走りつゝ、跳りつゝ、  
行く行く絶えず歌ひつゝ、  
夢より淡きさゝやきや。  
海原さしてためらへば  
天は女神の上に見る。

With her rainbow locks  
Streaming among the streams;  
Her steps paved with green  
The downward revine  
Which slopes to the western gleams:  
And gliding and spriging,  
She went, ever singing,  
In murmurs as soft as sleep;  
The Earth seemed to love her,  
And Heaven smiled above her,

地は女神を愛づるめり。

河の男神のアルヒュース、

さむき雪崩の上に立ち、

三叉戟を打ち振れば

山裂け、岩も粉微塵、

エリマンサスの荒山も

靨とひゞきて揺らざたり。

黯きみなみの山風は

音もなき雲のおくつきの

うしろに深く隠れ去り、

地震、いかづちは麓なる

瀧津瀬かゝる巖をも

たゞきれぐに摧きたり。

あはれ、ドリアの海原の

岸べをさしてひた走り、

水の女神の遁れ去る

はやき光りを慕ひ行く

川の男神の鬚髪は

早瀬の影に見えたりき。

The urns of the silent snow,  
And earthquake and thunder  
Did rend in sunder  
The bars of the springs below:  
The beard and the hair  
Of the river God were  
Seen through the torrent's sweep,  
As he followed the light  
Of the fleet nymph's flight  
To the brink of the Dorian deep.

As she lingered towards the deep,  
  
Then Alpheus bold,  
On his glacier cold,  
With his trident the mountains strook;  
And opened a chasm  
In the rocks;—with the spasm  
All Frymanthus shook.  
And the black south wind  
It concealed behind

『あはれ、救へよ。導けよ。』

海神、われをかくせかし。

わが髪今ぞつかまるゝ。』

と、いろく蒼溟も聞きぬらし、

いのりの言葉をはらぬに

底海ゆりて開きたり。

かくて地なる玉姫は

照るや、日影もさながらに

みなぞこ深く逃げ入りつ、

たちまち寄する巨濤に

からきドリアの汐の瀬と

分つすべなく混りたり。

緑柱玉の海原の

かぐろき汚照もさながらに

アルヒュースつと飛入りぬ、

雲捲く風にしたがひて、

遁しはせじと意氣猛に

鳩を追ひ行く鷲のごと。

Behind her descended,  
Her billows unblended .  
With the brackish Dorian steam :  
Like a gloomy stain  
On the emerald main  
Alpheus rushed behind,—  
As an eagle pursuing  
A dove to its ruin  
Down the streams of the cloudy wind.

“ Oh, save me ! Oh, guide me !  
And bid the deep hide me.  
For he grasps me now by thh hair ! ”  
The loud Ocean heard,  
To its blue depth stirred,  
And divided at her prayer ;  
And under tne water  
The Earth's white daughter  
Fled like a sunny beam,

珠ちりばめし高座たかくらに

大海原の神々が

すはりましたます殿の下、

たふとき石の堆かきこえて

かよりかくより波立てる

珊瑚のはやしつらぬきて、

汐のながれの底ふかく

彩の光りのあみを織る

おぼろの日影つらぬきて、

影さながらの波の色

森の夜よりみどり濃こき

もゝの岩室いはむろ、洞穴ほらの下、

鮫まや、かぐろき旗魚かぢとほし、

いそげとばかり促うながして

大海原の泡の下、

山の裂け目をつらぬきて、

女神、男神はひたすらに

ドリアの宮に行き着きぬ。

今やエンナの山々の

Under the bowers  
Where the Ocean Powers  
Sit on their pearlèd thrones,  
Through the coral woods  
Of the weltering floods,  
Over heaps of unvalued stores :  
Through the dim beams  
Which amid the streams  
Weave a network of coloured light ;  
And under the caves,

Where the shadowy waves  
Are as green as the forest's night :  
Outspeeding the shark,  
Under the ocean foam,  
And up through the rifts  
Of the mountain cliffs  
They passed to their Dorian home.

And now from their fountains

山の奥なる泉より  
朝あたゝかき谷くだり、  
ひとたび断えし友垣の  
心なかくにあへること  
二人は水業いそしみぬ。  
日出で、階にいや、けき  
釣床くだり、斜めなる  
丘べの洞にをどり入る。  
ひるはふもとの森林、  
山百合匂ふ野を過ぎて

In Enna's mountains,  
Down one vale where the morning basks,  
Like friends once parted  
Grown single-hearted,  
They ply their watery tasks.  
At sunrise they leap  
From their cradles steep  
In the cave of the shelving hill;  
At noontide they flow  
Through the woods below

偕に流れて停まらず。  
夜はオーチシアの岸の下  
波立ちさはぐ海原の  
底にぞ偕にねむるなる。  
生命をよそに戀ひ戀はれ、  
晴れわたりたる空高く  
ねむる魂にも似たるかな。

一千八百二十年ピサに於て。

And the meadows of Asphodel;  
And at night they sleep  
In the rocking deep  
Beneath the the Ortygian shore;  
Like spirits that lie  
In the azure sky  
When they love but live no more.

Pisa, 1820



日は暖かに

日は暖かに、空晴れわたる、  
波きらくと疾く舞ひをとり、  
青島、雪の消ぬ山かけて  
ひる、紫の光りたなびく。  
つち濕ほへる息吹はかるく  
ふくらみ初めしその芽を繞る。  
歡喜わかき聲さながらに

Stanzas.

The sun is warm the sky is clear,  
The waves are dancing fast and bright,  
Blue isles and snowy mountains wear  
The purple noon's transparent light:  
The breath of the moist earth is light  
Around its unexpanded buds;  
I like many a voice of one delight,

風、鳥、八重の汐路のみかは、  
市の聲さへ幽かなるかな。

足踏み入れぬ大海原に  
みどり、むらさき海草浮び、  
星融け降りし光の如く  
波、磯濱に寄せては碎く。  
ひとり真砂にわれ佇めば  
真晝の太海に射返る日ざし、  
わがへに光り、拍子をかしく

The winds, the birds, the ocean floods,  
The City's voice itself is soft, like Solitude's.

I see the Deep's untrampled floor  
With green and purple seaweed strown;  
I see the waves upon the shore,  
Like light dissolved in star-showers, thrown:  
I sit upon the sands alone,  
The lightning of the noontide ocean  
Is flashing around me, and a tone

と欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

の感あるべし

立つ波音のゆかしきかなや。  
誰か今わが快樂知らんや。

悲しや、もたじ、希望、健康、

うちに平和、ほかに恬静、

あはれ、聖者が、黙思より得て

榮光のかむり胸にをさめし

かのたぐひなき心の満足、

名譽も、戀も、暇も、力も。

此等のうちにある人見れば――

生くるたのしと皆ほくゑめど、  
その酒杯はわれにふさはじ。

さはれ、只今、絶えし希望も

風、波よりもいや穏かなり。

眠の如く死の來るまで

倦める兒のごと身を横へて、

うまれし者の堪へでかなはぬ

煩ひの生を泣きや過さむ。

氣はけぬるきも、わが頬は寒く、

Smiling they live and call life pleasure ;  
To me that cup has been dealt in another measure

Yet now despair itself is mild,  
Even as the winds and waters are ;  
I could lie down like a tired child,  
And weep away the life of care  
Which I have borne and yet must bear,  
Till death like sleep might steal on me,  
And I might feel in the warm air

Arises from its measured motion,  
How sweet! did any heart now share in my  
emotion.

Alas! I have nor hope nor health,  
Nor peace within nor calm around,  
Nor that content surpassing wealth  
The sage in meditation found,  
And walked with inward glory crowned.—  
Nor fame, nor power, nor love, nor leisure.  
Others I see whom these surround—

わが身を人の慈しまねば  
人や泣くらむ泣きやいたまむ。

一千八百十八年十二月

Shall on its stainless glory set,  
Will linger, though enjoyed, like joy in  
memory yet.

December, 1818.

死なんとすなる額吹きはらふ  
海のさびしき音をぞ聞くなる。  
はやくも老いしわが亡き心、  
今日のよき日の行くを望みて  
時じく哭きあざみ笑へば  
われを寒しと人や泣くらむ。  
燦たる晩暉入らんとするとき、  
こゝろに残る歡樂のごと  
空にいざよふ今日の日に似す

My cheek grow cold. and hear the sea  
Breathe o'er my dying brain its last monotony.

Some might lament that I were cold.  
As I, when this sweet day is gone,  
Which my lost heart, too soon grown old,  
Insults with this untimely moan ;  
They might lament—for I am one  
Whom men love not,—and yet regret,  
Unlike this day, which, when sun

人の世ならぬ遠きある世の、  
あはれ、絃の音、よし、高くとも、

葉はふるはじよ。  
快樂撒くとも、

汝れが唱ふるしらべの露の  
星こそ醒むれ。

影ほのかなる月はねむるも、  
今宵もくだち夜半としならば、

The star will awaken,  
Though the moon sleep a full hour later  
To-night:  
No leaf will be shaken  
Whilst the dews of thy melody scatter  
Delight.  
Though the sound overpowers,  
Sing again, with thy sweet voice revealing

六絃琴に合して歌ふ  
手弱女に  
月ほのかなる彩の光が  
かすけく寒き天星越えて  
照るもさながら、  
いともやさしき、さりや、汝が聲、  
魂なき絃に  
その音與へぬ。

An Ariette for Music.

To a Lady singing to Her  
Accompaniment on the Guitar.

As the moon's soft splendour  
O'er the faint cold starlight of heaven  
Is thrown,  
So thy voice most tender  
To the strings without soul has given  
Its own.

月のひかりと  
 心とひとつなる世の  
 樂と  
 ふしもゆかしく  
 君よ、歌へな。

わが心の女王に與ふ

月あきらかに昇るとき、  
 夕ほのあかき森さして  
 迷ひ行かむか、我妹子よ。  
 あはれ、夜風に吹かれつゝ、  
 其處にて、晝は言ひも得ぬ  
 ことをひそかに囁かむ。

To the Queen of my Heart.

Shall we roam, my love,  
 To the twilight grove,  
 When the moon is rising bright?  
 Oh, I'll whisper there  
 In the cool night-air,  
 What I dare not in broad daylight!

A tone

Of some world far from ours,  
 Where music and moonlight and feeling  
 Are one.

わが胸知らす女王よ。  
 さむき光が汝が顔に  
 さすを見るこそ嬉しけれ。  
 やすむとなき海原に  
 われと逍遙ひ行くらむか。  
 荒山路に迷はむか。  
 かよりかくより、鳴りとよみ、  
 飛び散る波の底ふかく  
 流るゝ潮を聴くらむか。

How I love to gaze  
 As the cold ray strays  
 O'er thy face, my heart's throned queen!

Wilt thou roam with me  
 To the restless sea,  
 And linger upon the steep,  
 And list to the flow  
 Of the waves below  
 How they toss and roar and leap?

汝れをし見れば、忍ぶれど  
 色に出でなん物思ひ、  
 そのひとはしを語りてむ。  
 星のかすけき光より  
 いやかゝやかの汝が姿、  
 空の緯のごと見ゆるらむ。  
 細流のおもに、あらゝぎに  
 ほの青白き月影が  
 銀の光をながすとき、

I'll tell thee a part  
 Of the thoughts that start  
 To being when thou art nigh;  
 And thy beauty, more bright  
 Than the stars' soft light,  
 Shall seen as a weft from the sky.

When the pale moon beam  
 On tower and stream  
 Sheds a flood of silver sheen,

いざもろともに逍遙はむ。  
 あはれ、夜風に吹かれつゝ、  
 其處にて、晝は言ひも得ぬ  
 ことをひそかに囁かむ。

When the moon is rising bright,  
 And I'll whisper there  
 In the cool night-air  
 What I dare not in broad daylight.

沸き立ち返るおほ濤と  
 夜、ほとばしる波の穂の  
 うへ吹き狂ふあら風は  
 おさなき生より煩惱が  
 わが心をば擾したる  
 其のくるしみに似たる哉。  
 月あきらかに昇るとき、  
 海原さして、森さして

Those boiling waves  
 And the storm that raves  
 At night o'er their foaming crest,  
 Resemble the strife  
 That, from earliest life,  
 The passions have waged in my breast.

Oh, come then and rove  
 To the sea or the grove

過去

「戀」のゆかしき花園に  
幸おほかりし日を埋めて、  
冷たき骸をかくすべみ  
土をばかけず、花、木の葉  
たかう積みしを忘れしや。  
墜つる快樂は花なれや。  
のこる希望は木の葉なれや。

The Past.

Wilt thou forget the happy hours  
Which we buried in Love's sweet bowers,  
Heaping over their corpses cold  
Blossoms and leaves, instead of mould?  
Blossoms which were the joys that fell,  
And leaves, the hopes that yet remain.

死にたる過去を忘れしや。  
あはれ、今なほうらめしと  
浮ばぬ魂のまよふかな。  
心をはかのおもひでや、  
冥府路をしのぶかなしみや、  
うら淋しげに語るらく、  
快樂も去れば苦痛よ。

Forget the dead, the past? O yet  
There are ghosts that may take revenge for it,  
Memories that make the heart a tomb,  
Regrets which glide through the spirit's gloom,  
And with ghastly whispers tell  
That joy, once lost, is pain.

と欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

の感あるべし



——に與ふ

かすかなる聲は死ぬとも、  
絃の音は人のこゝろの  
底ふかくふるひ行くかな。  
美しき堇病むとも、  
花の香は袖にのこりて  
なかくに消え失せぬかな。

To——

Music, when soft voices die,  
Vibrates in the memory——  
Odours, when sweet violets sicken,  
Live within the sense they quicken.

花薔薇の花枯れつるも、  
薔薇の葉は戀しき人の  
床なして落ち積りたり。  
さりや、君、君行きつるも、  
たゞ君を懐ひ出づれば  
「戀」の上に眠れるこゝち。

Rose leaves, when the rose is dead,  
Are heaped for the beloved's bed;  
And so thy thoughts, when thou art gone,  
Love itself shall slumber on.

哀 歌 一千八百二十一年ピサにて

老いさらばひし冬は今  
ふる山陰に去り行きつ、  
照る日の海のおしよせて  
三冬の夜のさかひをば  
侵す濱邊の空高く  
舞ひひるがへる星よりぞ  
春おもむろに降りける。

もしも、陸、空、海原が  
春ちか寄るも興せすば  
われも興せじ、チチブラよ。  
少女しづかに、ひやゝかに  
鴛鴦のふすまの上にある。  
片足、白き死の床に、  
片足、棺に、片足は  
骨ををさむるみあらかに  
おゝ、片足は何處ぞや。

Rejoice not when spring approaches,  
We did not rejoice in thee,  
Ginevra!

She is still, she is cold  
On the bridal couch,  
One step to the white deathbed,  
And one to the bier,  
And one to the charnel—and one, O where?  
The dark arrow fled

The Dirge.

Old winter was gone  
In his weakness back to the mountains hoar,  
And the spring came down  
From the planet that hovers upon the shore  
Where the sea of sunlight encroaches  
On the limits of wintry night;  
If the land, and the air, and the sea

と欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

の感あるべし

日ざかり、黯き矢は落ちぬ。

御空をわたる天つ日が

復、ひむがしに出る前、

鼠は胸に巢をくはむ。

黄金まばゆき美髪には

蛆こそすだき寄るべけれ。

日をば導く大神は

光る玉座に立てるまに

少女ぞとはに眠りける。

自由

炎焔みなぎる山相應へ、

いかづちなして轟きわたる。

荒海原は相おどろかし、

おどろくと風吹き立てば

氷の巖ゆらぎぞみだる。

孤雲より稻妻ひかり、

Liberty.

The fiery mountains answer each other ;  
Their thunderings are echoed from zone  
to zone ;

The tempestuous oceans awake one another,  
And the ice-rocks are shaken round  
winter's zone

When the clarion of the Typhoon is  
blown.

From a single cloud the lightning flashes,

In the noon.

Ere the sun through heaven once more has  
rolled,

The rats in her heart  
Will have made their nests,  
And the worms be alive in her golden hair,  
While the spirit that guides the sun,  
Sits throned in his flaming chair,  
She shall sleep

Pisa, 1821.

と欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

の感あるべし

を請ふしし愛讀の榮を賜へ

の感あるべし

十一

日は濤、高嶺は水煙より  
 雲、風貫いて光りきらめく。  
 魂より魂と、國より國と、  
 市より里と爾が朝あけぬ—  
 朝の光の先鋒にあはひ  
 暴君、奴隸、みな夜の影。

From billow and mountain and exhaltation  
 The sunlight is darted through vapour  
 and blast;  
 From spirit to spirit, from nation to nation,  
 From city to hamlet thy dawning is cast—  
 And tyrants and slaves are like shadows  
 of night  
 In the van of the morning light.

島々かけて輝きわたり、  
 地震ふり市を灰と化すれば  
 も、の市みな震ひはためき、  
 響は地下に咆るも遙か。  
 稻妻よりも爾が眼鏡く、  
 地震ふるよりも爾が足疾し。  
 爾れ海原の鳴りを鎮め、  
 爾れ熟視むれば火山もあらず。  
 爾れに比すれば日もまた暗し。

Whilst a thousand isles are illumined around,  
 Earthquake is trampling one city to ashes,  
 And hundred are shuddering and tottering;  
 the sound  
 Is the bellowing underground.  
 But keener thy gaze than the lightning's glare,  
 And swifter thy step than the earthquakes  
 tramp;  
 Thou deafenest the rage of the ocean; thy  
 stare  
 Makes blind the volcanoes; the sun's bright  
 lamp  
 To thine is a fen-fire damp.

西風に與ふる歌

一

おゝ、荒き西風、汝れは  
 秋の御神の息吹かや。  
 汝れあれば、目にこそ見えね、  
 朽葉は追はれ、さながらに  
 妖怪の咒する者より  
 翔り飛びつゝ、逃ぐるごと

Ode to the West Wind.

I.

O, wild West Wind, thou breath of  
 Autumn's beir,  
 Thou, from whose unseen presence the  
 leaves dead  
 Are driven, like ghosts from an enchanter  
 fleeing,

黄に、黒に、氣白く、緋く  
 疫みさらぼひし群ぞ行く、  
 おゝ、汝れがかぐろき冬の  
 床に、羽ある種子驅れば  
 亡骸の墓にあるごと  
 一片ごとに寒う伏し、  
 汝が弟、緑りの春が  
 夢なる地をば覺まさんと  
 その號角をたからかに吹き、  
 (羊追ふごと、なつかしき

Yellow, and black, and pale, and hectic red,

Pestilence-stricken multitudes: O, thou,

Who chariotest to their dark winty bed

The winged seeds, where they lie cold and low,

Each like a corpse within its grave, until

Thine azure sister of the spring shall blow

Her clarion o'er the dreaming earth, and fill

を讀し以て愛の詩書の榮を賜へ

の感あるべし

木の芽をばこち吹く風に

生きよとばかり野に、山に

いとわかき色を、薫りを

満たすらむまで起きもせじ。

何處にも迷ひ行くなる

荒き御靈よ、破壊者よ、

保護者よ、聞け、おゝ、聞けや。

二

ちぎれく、飛び散る雲は

見上ぐる空に亂れつゝ、

下界の朽葉さながら

汝れが過ぎ行く途に在り、

天と海、枝さしかはす

はてより汝れは天使なる

稻妻を、雨をふるはし、

大海原のほのぐらき

極みより天のはてまで

たい茫々と、汝が通ふ

大空の巨濤のみに

Loose clouds like earth's decaying leaves  
are shed,  
Shook from the tangled boughs of Heaven  
and Ocean,

Angels of rain and lightning : there are spread  
On the blue surface of thine airy surge,  
Like the bright hair uplifted from the head

(Driving sweet buds like flocks to feed in air)  
With living hues and odours plain and hill :  
Wild Spirit, which art moving everywhere ;  
Destroyer and preserver ; hear, O hear !

II.

Thou on whose stream, 'mid the steep sky's  
commotion,

を講述し以て愛讀の榮を賜へ

の感あるべし

を講述し以て刻下の讀書界の飢渴を癒さんと欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

の感あるべし

描寫すだに心もそゝる  
 こゝろよき音にまどろみつ、  
 瑠璃なして流るゝ水の  
 輕石島のそのほとり、  
 べイエイの入江に浮ぶ  
 三  
 凝るらんか、火や、暗雨や、  
 霰や落ちむ。おゝ、聞けや。  
 汝がたちからの水煙、

Of vapours, from whose solid atmosphere  
 Black rain, and fire, and hail will burst ;  
 O hear !

III.

Thou who didst waken from its summer  
 dreams  
 The blue Mediterranean, where he lay,  
 Lulled by the coil of his crystalline streams,

逆立ちてきらめく髪も  
 ひた荒れ狂ふ祭尼の  
 かくやとばかり、迫り來る  
 雨風のたぶさ亂しぬ。  
 かくても汝れは暮れて行く  
 古年を歌ひとぶらふ、  
 あはれ、閉ぢなんこの夜こそ  
 古年のいとおほひなる  
 墳塋まもる堂なれや、  
 堂なれや、掩ほひか、れる

Of some fierce Mænad, even from the  
 dim verge  
 Of the horizons to the zenith's height  
 The locks of the approaching storm. Thou  
 dirge

Of the dying year, to which this closing night  
 Will be the dome of a vast sepulchre,  
 Vaulted with all thy congregated might

薰りゆかしく酔ひぬべき

苔みどり、花くれなゐに

しげり満ちたるいにしへの

玉の宮、黄金の樓臺、

なぎの日和の波のまに

そよぎつゝ、立てるを眺め、

伏したる青き地中海、

そのしげき夏の夢をば

汝れこそ、今か呼び覺ませ。

汝れが行く途にあたれば

Beside a pumice isle in Baiæ's bay,  
And saw in sleep oid palaces and towers  
Quivering within the wave's intenser day,

All overgrown with azure moss and flowers  
So sweet, the sense faints picturing them!  
Thou

For whose path the Atlantic's level powers

大西洋のはて知らぬ

海原の汐路も裂けて、

海底深く、海の花、

鹹き花のいとやはらかき

大海原の森も、みな

汝が聲を聞けばたちまち

おそれ、をのゝき、白みつゝ、

ひれ伏しぬ、やよ、おゝ、聞けや。

Cleave themselves into chasms, while far below  
The sea-blooms and the oozy woods  
which wear  
The sapless foliage of the ocean, know  
Thy voice, and suddenly grow grey with fear,  
And tremble and despoil themselves : O hear ?

IV.

四

を詳述し以て刻下の讀書界の餘瀝を憶ごん  
と欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

の感あるべし



若しも、われ、汝れが聽くらむ

朽ちし木の葉の身ならんか、

若しも、われ、汝れと飛ぶらむ

疾き天雲の身ならんか、

汝れのごと自由ならずとも

汝が雄力の下に泣き、

勢を借りも得ぬべき

せめては波の身ならんか、

お、制馭なき西風よ、

空翔けめぐる汝れ追うて

天に入り飛ばむ願ひを

幻影としも思はざりし

幼時の子の身ならんか、

など、みづからの事をのみ

さは汝れに祈り乞はんや。

あはれ、われをば波のごと、

雲のごと、葉のごと起てよ。

この生、荆棘の中に落ち、

朱の血にわれぞ染みぬる。

時のおもさは汝れのごと

The comrade of thy wanderings over heaven,  
As then, when to outstrip thy skyey speed  
Scarce seemed a vision ; I would ne'er  
have striven

As thus with thee in prayer in my sore need.  
Oh ! lift me as a wave, a leaf, a cloud !  
If fall upon the thorns of life ! I bleed !

If I were a dead leaf thou mightest hear ;  
If I were a swift cloud to fly with thee ;  
A wave to pant beneath thy power, and share

The impulse of the strength, only less free  
Than thou, O, uncontrollable ! If even  
I were as in my boyhood, and could be

を譯述し以て刻下の讀書界の飢渴を癒さんと欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

の感あるべし

荒かりし、いと疾かりし、  
驕れりし身をかゝなへぬ。

五

かの森とひとしく、われを

汝が琴として弾かなむや。

かの森の木、の葉さながら

わが身の木の葉散らば散れ。

大なる、はた譜たへの

汝がとゞろきは二つより

A heavy weight of hours has chained and bowed  
One too like thee : tameless, and swift,  
and proud.

V.

Make me thy lyre, even as the forest is :  
What if my leaves are falling like its own !  
The tumult of thy mighty harmonies

美しく、哀れも深き

秋の調をかなづべし。

いとたけき御霊よ、汝れは

わが靈なれや。くるほしの

ものよ、汝れ、わが身たらずや。

急ぎあらたにうまれんと

枯れ落つる木の葉さながら

天地越えて、わが死にし

いにしへの思想追はずや。

まだ消えやらぬ圍爐裡より

Will take from both a deep, autumnal tone,  
Sweet though in sadness. Be thou, spirit  
fierce,  
My spirit ! Be thou me, impetuous one !

Drive my dead thought over the universe  
Like withered leaves to quicken a new birth !  
And, by the incantation of this verse,

を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さんと欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

の感あるべし

灰、火花吹き散らすごと

あゝ、この歌の念咒いのりより

わが言ことを浮世に撒けや。

まだ覺さめやらぬ下界したがいに

預言よこごとをひっかすべくば

わが唇に出でしめよ。

おゝ、風よ、冬去り來れば

などか、春とておくれんや。

シェレールの詩完

Scatter, as from an unextinguished hearth  
Ashes and sparks, my words among mankind!  
Be through my lips to unawakened earth  
  
The trumpet of a prophecy! O, wind,  
If Winter comes, can Spring be far behind?

明治三十九年一月二日印刷

明治三十九年一月四日發行

定價金參拾五錢

郵税金四錢

著 者 小 原 要 逸

發 行 者 日 高 藤 巖 衛

印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 日 吉 町 拾 番 地 中 村 彌 助

印 刷 所 東 京 市 京 橋 區 日 吉 町 拾 番 地 近 藤 商 店

發 行 所 東 京 市 本 郷 區 千 駄 木 林 町 百 九 拾 六 番 地 日 高 有 倫 堂



を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さんと欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

讀めば諸名家とまじりて一室を風吹くべし

明治三十八年十二月一日印刷

新刊發行の都度増補訂正す

# 有倫堂出版書目

東京市本郷區千駄木林町百九十六番地

日高有倫堂

を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さんと欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

謹めて請名をまじへて一室を居るべし

泉鏡花著  
鏑木清方畫

近刊  
小説  
誓之卷

定價七十錢  
郵稅十錢

(上製總クロース美本)

これ鏡花先生があふる、ばかりの同情を以て、天と地と人に訴へて同情を求めたる、初戀の詩篇也。

を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さんと欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

讀めば諸名家と共に一堂春風の中い座るの感あるべし

大町桂月著

新刊 我が文章

定價四拾八錢 郵税金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縦横自在真情流露し行く處に行き止る處に止まり些の街ふ洒落飄逸快調にして直ちに人を以て文を遣りか言外に情熱溢る文此に至れば聖なり先の生の文の如きは、實に當代の逸品なり

文學士 久保天隨著

近刊 紀行 山水寫生

定價四拾五錢 郵税金六錢

天隨氏の紀行文は、世すでに定評あり。泰華を眼前に仰ぎ、溟渤を脚底に湧かしむるもの、これ其文の特色にして、決して、他人の模倣を容れざるものなり。本書收むるところは、長短無慮二十餘篇、その地を以てすれば、南鬼界の天に臨み、北蝦夷の境を踏み、實に著者帳中の秘たるものなり。造化の工を讚賞し、天地の美を景仰するもの机上この書なかるべからず。

徳田秋聲著

新刊 小説花たば

定價四拾五錢 郵税金六錢

此に美しく束ねられたる花の数は何々ぞ。紅白紫黄必しも剪綵の妙を悉さざれども、清き自然の野趣は此の一束に盡きたり。全篇長短合せて十三文章、總て作者獨擅の詩材にして、亦獨得の文字なり。秋聲子が真技倆を抱負を窺はむには、此篇を措て他に求むべからず。切に江湖の眞摯なる讀者の高覽を希望す。文學士 小原無絃譯

新刊 原文 シェレ一の詩

定價參拾五錢 郵税金四錢

シエレ一は一個の豫言者なり抒情詩人の醇なる者なり其詩を作為するや神興の白熱を以てす光焰萬丈生氣辭句に溢る眞個天馬空を奔るが如し無絃子其詩を心讀する多年今や彩筆を揮つて遺憾なく朗々として眞に高誦眞髓を傳へて遺憾なく朗々として眞に高誦するに足る乞ふ詩神の寵兒たる者一巻を抱いて詩腸を肥せ。

文學士 大町桂月先生選評 日高有倫堂編輯部編纂

近刊 明治大家文集

定價金七十錢 郵税金拾錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず文星森列著作の多きと汗牛充棟も當ならず今一々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易のことにあらずこの書正確なる批評眼を以て明治三十八年の間論文といはず美文といはず小説といはず苟も文章を以て一家をなす特色を有せる文豪數十名を選びまた其名文豪の特色を發揮せる名篇を選び添ふるに桂月先生の詳細なる批評を以てす明治文章家中の眞の文章家は集つて此の書にあり眞に之れ明治文學の縮圖にして一讀の下以て明治の諸大家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たるを失はず文を學ぶ人においては以て眞の模範とするに足る有益にして且つ興味ある良書也

秋元蘆風譯

新刊 詩野葡萄

定價參拾五錢 郵税金六錢

收むる處、詩、數十篇、汎く、獨逸詩人の傑作中、主として、叙情的逸品を採つて、之を邦韻に翻したるもの、原詩の對照と、卷末の註に翻したるもの、獨逸詩人の面影を窺ふと同時に、庭園の花に酔ゑるものは、來つて、野邊の果實を味へ。文學士 小原無絃譯

近刊 原文 バーンズの詩

定價金參拾錢 郵税金四錢

文學に平等主義を持して革命思想を鼓吹せし者は實にパロンスを以て古今東西隨一と爲す其詩や古法舊格を脱して天真朴直なる精神を現じ最も創新を以て勝る今や無絃子の靈管に依りて譯成り多感多情にして功名心燃ゆる如き若き田園詩人の面目髪髭として其一巻に溢る満天下の才子佳人幸に愛讀の榮を吝しむ勿れ

を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さん

讀めば諸名家と共に一堂春風の中い

大町桂月著

代表日本人

定價四拾五錢 郵税金六錢

日本人を化せしは區々たる教養にあらざりし日本人也歴史也國體也祖先の發揮せる國民性也我が國には儒教佛敎以外一種の武士道ありて今日の發展を致したる事今更言を待たざる所なるが武士道の真相を知らむとせば理論のみにては不十分也之を人物事實に徴せざるべからず此書日本國民の特性の何たるかを説き建國以來その特性を發揮せる人を擇びて其面目を描き日本國民の前路に光明を與へ敎訓を與ふ一風變はれる日本國民の歴史也兼ねて道德經也。

大町桂月先生選

新刊 時代青年文集

定價四十錢 郵税金六錢

世に活氣あり情熱あり純潔玉の如きは青年にして青年は實に時代の花也火也當代の文豪桂月先生最も青年を愛し指導敎訓須臾も懈らず爰に滿天下青年諸子の傑作數千篇中

帝國夏目先生序  
大學上田先生序  
教授ロイド先生文  
文學士 小松武治譯

近刊 續沙翁物語集

定價七拾錢 郵税金八錢

譯者曩日沙翁物語十篇を公にして世間の好評を博し期中ならずして第六版を重ねるに至れり今又更らに自餘の十篇を譯集して續沙翁物語集を篇す各篇悉く名什譯筆例によりて明快加ふるに細密なる註解を施して讀者の便益を計れり

文學士 久保天隨著

近刊 文壇獅子吼

定價參拾五錢 郵税金六錢

博大精該の才識を以て、不偏不黨、文壇の趨勢を論斷し、毫も顧慮するところなきは、評論家としての著者の態度なり、その問題は、文學・史學・宗教・道德の諸方面に亘り、虬龍の片甲、なほ能く雲を成す。一卷收むるところ、凡そ七八十篇、長短錯落、理致あり、情趣あり、眞個人間稀に見るの好文也。

者を以て有名なるが、其の饑渴を癒さん

より其尤なる者を抜き厳正なる批評を加へて時代青年文集一卷を編せらるる所叙事抒情あり論說書簡あり將た新體詩ありな絢爛花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を醫すべく元氣を鼓舞すべし附録には文壇の一大疑問たる夏目先生の「一夜」を始め當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

近刊 紫文摘英

定價四十錢 郵税金八錢

源氏物語が千古の大文學たるは今更贅言を要せず而も之を教科書に使用せむには餘りに浩濶に過ぎ又事實に悖倫非徳の箇處多く女子教育家の齊しく遺憾とするところ源氏博士の稱ある本居先生大に之を慨し五十帖をを通じて其の英を摘み薙を去り最も聯絡と校訂に意を用ひ「紫文摘英」一卷を編せらる即ち是れ源語全篇の縮圖にして一讀其大意を窺ふべく併も紫文の妙は此一卷に盡くせり各種女學校の良教科書たるは勿論苟も國文學に志あるの士女は必ず一本を備へざるべからず乞ふ高讀の榮を給へ

文學士 久保天隨著

新刊 美文 夕紅葉

定價三拾五錢 郵税金六錢

著者の美文は、潑墨の山水の如く、氣韻生动、底の軟弱文字に非ず。三生石、高遠城の如き、事すでに奇に、文亦た雋、人をして、覺えず、起舞せしむ。韻文には、拔都征歐の歌、蒙古の大英雄を謳歌し、一唱腕鳴り肉躍る。唯だ本書に於て之を觀するべし。

細越夏村著

近刊 靈 笛

定價參拾錢 郵税金四錢

日光暉々の野を、深き水の行くを見ずや。水面は煌爛として、金波銀波何ぞ燦々の極みなる。然れども、想へ、十尋の底、油々のして運行する流れの何ぞ夫れ幽冥なるや。斯の如きは、詩人夏村の胸腔に澎湃するや。想の汪流なり。詩人夏村の胸腔に澎湃するや。坐の水色に、耳目を洗ふ可く、芳草岸頭、清麗自然の「靈笛」の奥秘なる幽韻を聴かむ。

讀めば諸名家と共に一堂春風の中は、感あるべし

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著

改版 五版 向上の一路

定價參十錢 郵稅六錢

向上の一路に就かんと欲する者は此書を読  
め我が國に於て哲學的社會主義を建設した  
るは此書を始めてとす安部氏の駁論及著者  
の駁論は益々新社會主義の本領を發揮し  
共に光彩陸讀たり▲近時の一大著述にして  
情に該れ、筆を執る者は此書なり敢て江湖の讀書  
子に勸む  
大町桂月先生 中内蝶二先生合著

版六 少女と山水

定價參拾五錢 郵稅金六錢

人生の美凝つて少女に在り自然の美凝つて  
山水の美凝つて山水の美や豪宕にして瀟瀟少女  
の美や優婉にして可憐蝶二君の艶麗の文少  
女の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月  
君の酒脱の文山水の幽趣を寫して雲煙紙表  
に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を  
の手に高尙優雅家庭の讀物ともすべく軍國の  
讀者諸賢幸に這般清麗の文字に接して宇宙  
の美を味ひ給ふべき也

刊新 接神術

定價貳拾貳錢 郵稅金四錢

天師と稱して大聖伏羲の古道を唱導する著  
者が、詩人シルレルの雪の如く皓く月の如  
く幽に、花の如く艶なるものを、理想の一巻、接  
神術一名神智學なるものを譯して、聖靈は  
神母なりとの大論斷を試む、確かに思想界  
に大波瀾を起すべき著、殊に世界の百大詩  
人の母心を讚美せる百人一首を附録として  
東郷大將母堂に捧ぐ、荷くも文藝に志ある  
士女は之を讀まざるべからず

文學士 大町桂月先生書翰 木村鷹太郎先生書翰  
文學士 上田 敏先生書翰 岩野 泡 鳴 著

新體 詩集 夕潮

定價參拾五錢 郵稅六錢

著者の詩冥遠幽邃、深く多大の情熱を藏し  
て、うち無窮の悲觀を備ふ而してその行  
文自在の調、激して豪健奇拔の想を構へ、  
沈んでまた可憐の情を寄す、海に向つて、  
苟も久遠の感慨あるものは來つて、この冥  
想的詩人の「ゆふ潮」を一讀せられよ、

文學士 大町桂月著

版七 わが筆

定價四拾五錢 郵稅六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓  
あり才氣あり霸氣あり或は洒脱に或は沈痛  
に或は眞面目に或は詼諧に短くして寸鐵人  
を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに  
一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆  
卓見を以てす家庭學校社會及び文學等に關する  
間に見る處に充ち才情擲すべき美文もその  
大町桂月先生序 角金潮聲著

版參 宇宙と人生

定價貳拾五錢 郵稅金四錢

宇宙と人生の問題豈常人の言ひ易き所なら  
んや茲に哲學者あり宇宙の幽を闡き玄を究  
め森羅萬象の生滅變化の本源に溯りて人生  
の眞諦を内觀直視せんとす玆に詩人あり天  
地の美を内觀せんに肉薄して以て人生の本義  
を直觀捕捉せんとす本書は哲學者の想と詩  
人の情を文に綴りしもの古高の韻、艶麗の  
謳はんとする者は來りて本書を緝け

海老名彈正先生著

版再 宗教々育觀

定價五拾五錢 郵稅八錢

宗教界の明星として名聲天下に轟ける海老  
名先生は本書に於て教育問題に關する所信  
を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動す  
るに足るものあるや必せり見よ先生が該博  
の識公明の論一讀人をしして快刀思想界の亂  
麻を截つるの感あらしむ而かも本書の内容は  
單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に  
對する先生最近の思想を發表せられたるも  
の實に濛々たる我邦思想界に於ける一大探  
海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目  
して本書の光燭に接せよ  
匿名隱士著

版七 破天論

定價參拾錢 郵稅四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議  
的に堂々駁論を試み三哲學の宇宙觀と人  
生觀とを鼓吹したる壯快の書也本書の出  
るや全國各新聞雜誌の大好評を博せり以て本  
日尙淺きに不拘既に六版を印刷せり  
書が如何に愛讀せらるゝかを知らべし



網島梁川著

# 再版 梁川文集

定價 金貳圓廿五錢  
郵稅 金拾五錢

上製總クロース 頁數約千頁頗美本

梁川綱島先生、其高邁博大の識、精嚴理到の言、恰も燭を把つて照すが如し、されど先生は談理是れ能とする學究に非ず一面冷靜細緻の頭腦を備へたる倫理學者にして他面別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天他を戀ひ此戀を湛へて日夜に瞑想し日暮に修養止まざる哲人也解脫の人也、理を談ずれば簡淨にして靈活、感興を遣れば深邃にして豊麗、其想獨特、其文獨特、鬱然一家を成して現代思想界の一角に拔く可らざる自家の領を占めて妄に他人の追従するを許さず、是れ筆に非ずして人格なれば也、弊堂幸に玉稿を請うて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む。

八

山口先生題詩 蘆風秋元喜久雄譯

# 訂正 四版 詩粹 紛紅集

美術的製本  
定價 金貳圓四錢  
郵稅 四錢

ゲーテ、シルレル、ケルチル等獨逸の七大神人が金玉の佳什を選び、之を流麗精眞なる筆を以て、翻譯したるもの、一字一句の細と雖ども、悉く原詩の美を顯はして遺さず。收むる所、清美なるあり、優婉なるあり、風雅なるあり、艶麗なるあり、例へば飛紅粉々として、翳勃たる香氣、人をして醉はしむるが如きもの集つて皆此中に在り、別に原詩を添へ對照に便す。

萬朝報記者 茅原華山編纂

# 青年と詩吟

定價 貳圓五錢  
郵稅 四錢

人生豈思詩情なかるべけんや「青年と詩吟」は茅原華山氏が各諸先生に囑して各々其愛誦される、漢詩、和歌、新體詩、俳句を撰び編纂せられたるの書日夕此卷を抱いて誦誦せば其品性を修養し其志氣を砥礪するの功蓋し計るべからざるものなり

文科 夏目先生 校閱 チャールス、ラム 著  
大學 上田先生 序文 文學士 小松武治 譯  
講師 ロイド先生

# 訂正 六版 標註 沙翁物語集

定價 七十錢  
郵稅 十錢

●上製クロース四百頁頗る美本

古英雄亞歷山陣中に在りて常にホーマーを誦し那破倫大帝兵馬の間、手、ゲーテを繙かざることをなかりしと聞く戰勝國民豈に文界の巨璧シエロクスピアを讀むの餘裕なくして可ならんや本書は沙翁戯曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロマオ、ジュリエット及冬物語等通じて十編の物語を採萃し精緻なる翻譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附録を以てす。特に文科大學講師先生の校閱を仰ぎたる者にして荷も沙翁戯曲の何たるを窺はんと欲するの士は須らく一本を購うて座右に備ふべきの書也

岩野泡鳴著

# 新體 悲戀悲歌 詩集

定價 參拾五錢  
郵稅 金四錢

著者の詩既に世に定評あり、その久遠無窮の悲觀、常に高遠幽邃なる冥想を経て、廣く人間界の煩悶を靈化する、蓋しこれ時代の詩界に獨得の地歩を占むるもの、而して「想の詩人」—海の詩人—今やまた「人間界の詩人」と呼ばんとす、向上か墮落か、乞ふ、この「悲戀悲歌」を見て、之を判じ給はんことを

高橋五郎著

# 杜伯品藻

定價 卅五錢  
郵稅 六錢

一言一行一動一靜天下の毀譽賛斥を招致すトリストイ伯も亦豪傑なる哉之を見ること或者は神の如く或者は鬼の如く著者此世界主義的博愛的絶對愛他的極端非戰的偉人物を四方八面より縱横論評し玲瓏玻璃屋に住する如し其嬉妍得失一目瞭然眞理の爲に之を論ず豈唯敵國の偉人として之を評騰する而已ならんや◎讀書子愛讀の榮を賜へ

九

海老名彈正先生著

### 再版 基督教本義

上製 六十五錢  
並製 郵稅十錢  
郵稅八錢

基督教の本義果して如何之れか明白なる解  
答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放て  
る豫言者牧師教祖の抱懐せる思想經驗に依  
らざるはなし本書は基督教界の明星海老名  
彈正先生卓抜の識勇健の筆を以て上はモ  
ゼより下ルイテラ、シユライエムツヘル  
に到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教  
の本義を説明せられたるもの也幸に愛讀の  
榮を賜へ

齋木仙醉先生譯

### トルストイ教訓小説集

定價金參拾錢 郵稅金四錢  
トルストイの宗教論や、大作小説や、海に  
是れ雄渾なる革命の聲也、凄壯なる大煩悶  
の聲也、思ふに渠が現世界の最大文豪たる  
所以蓋し茲にあらん、然れども人は狂瀾怒  
濤を壯とすると共に、湛然一碧の湖水を樂

海老名彈正先生著

### 人道

定價 拾錢  
郵稅 貳錢

先生時局に關し大に感慨するところあり豫  
言者的熱誠を傾盡して雄渾壯大萬丈の光焰  
を吐き以て日露戦争の意義を高めて國民の元  
氣を鼓舞作振せんと言ふ意營に軍國々民の必  
讀書たるのみならず軍隊慰問用の好冊子な  
り廣く世上の需要に應せんと言ふ幸に陸續御  
注文を賜へ  
加藤直士譯

### トルストイの日露戦争觀

定價金參拾錢  
郵稅金四錢

露國の巨人トルストイ伯が今回の日露戦争  
に關して如何なる意見を抱きたるかは  
何人も知らんと欲する所なり然るに伯は倫  
敦タイムスに於て「日露戦争觀」と題する一  
大論文を掲げて最も雄渾痛切に其詳細なる  
意見を発表したり今や邦人鶴首して其内容  
の一斑を知らんと欲する時に際して其介紹  
者を以て有名なる加藤先生に請ふて其全篇  
を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さん  
と欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

十

しまざるべからず。深林巨巖を賞すると共  
に、鳴禽野花を愛せざるべからず。本書は  
即ち後種の渴望を充たす處の光明の書也。  
讀者若し之を繙かば、鬢髮雪の如き老文豪  
が、如何に諄々として、天使の如き聲を以  
て、博愛、自然、自由、勞働の大々の福音を鼓  
吹するかを視ん。

苦學社社輯

### 苦學の伴侶

定價參拾錢  
郵稅四錢

生活の道に往き難める苦學生は此の書を讀  
め此の中に安慰と光明とを得ん堂々たる我  
國現時の諸大家の成功の秘訣を知らんとす  
る者は此の書を讀め此の中に諒々たる師父  
の警咳に接することを得ん嗚呼苦學嗚呼苦  
學古今誰か苦學せずして成功したる者や  
なる苟も學生にして苦學の心得なき者は忠實  
なる學生と謂ふこと能はず然れば此の書は  
學事に志せる總ての青年男女の好伴侶たり  
と謂ふべし請ふ一本を座右に供せられんこ

横山筆助著

### 再版 成功したる催眠暗示術 應用自在

定價參拾錢  
郵稅四錢

近時催眠術の書物多々出版せらるゝと雖ど  
も大抵不充分なる譯書、實際に益なき空論  
的なるもののみ多し、之に反して本書は經  
驗に經驗を積みたる斯學の老練家が、最新  
の學理と諸種の方法を参考して何人にも  
理解し得るやう又極めて懇切に述べられた  
るものなり、且つ加ふるに興味ある實驗書  
を以てす、本書出で、我が催眠術界の知識  
することを大ならん、好學の諸君御愛讀  
あらんことを。  
茅原華山編纂

### 我と人

定價貳拾錢  
郵稅六錢

本書は世間の好評を博したる『向上の一路』  
生命一體篇を別冊と爲したるものにして萬  
朝報の黒岩先生を始め諸家の談論文章を筆  
録したるものなり、柳は綠花は紅、是書を  
讀めば諸名家と共に一堂春風の中に座する  
の感あるべし

十一

鈴木秋子女史著

再版 軍國の婦人

定價廿八錢 郵稅四錢

戰爭の裏面に婦人あり戰爭は男子のみにてなすものと云ふものは未だ以て今日の時局を語るべからず本書は實に婦人戰時に於てなすべき活動の方法及び戰爭と婦人との天職を説きたるものにして事勢に適切なる事は勿論苟も婦人にして自己の修養發達を力むるものは必ず一讀せざるべからざるの書也

基督教講壇集

定價七十錢 郵稅八錢

本書は眞に生命の麴麩靈活の根原たる現代基督教界のあらゆる大家の説教を網羅掲載したる雜誌講壇の全部を合し改冊せしものなり居ながら各大家の口演を聽問する好冊子其内容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛讀の榮を給へ

新刊 杉山先生書簡 黑澤辰三郎編 日本名家手簡

定價金參拾錢 郵稅金六錢

世に立つて事をなさんとするもの先づ書翰文に熟達せざるべからず書翰文に熟達せんと欲するもの先づ先輩の往復文を研めざるべからず、是れ本書の出る所以なり本書收むる所我國大家の模範文に附するに各其小傳を以てし並に書簡文の變遷を明にす、苟くも當世の活舞臺に雄飛せんとするものは男女を論せず一讀せざるべからず

